ません、たゞ貴方の御一興にもと思ひましたから、私の身の上に就いてのむかしの迷信の一條を以て、お耳を汚した次第です、いづれ今暫くしましたら、美しい蝶になつて、又何所かでお目にかゝりませう』

と、云ひながら、蛹はもう口を利かなくなつたから、二人はこゝを出て、再び廣い野原の人となつた。

五九　杜鵑の物語

見渡す限り、何所も彼方も、美しい花に包まれて、天地は全く錦の世界かと思はれたのが、いつの間にかくも野原の景色が變つたのであらう、何所を見ても、只青々とした青野原で、鮮かな夏の光景は、二人の少年を包むのである。折から新樹の枝に、ツイぞ見ぬ小鳥が止まつて居る、二人は注意して夫れを見ると、初夏の天地には、無くてならぬ杜鵑であつた、さて杜鵑は又、何を語らうとするか、二人を見下して濁つて聲を放つのである。

『お聞き下さいまし、私の名は、むかしから人に知られて居まして、其文字の如きも、蜀魂、杜宇、子規、不如歸など〻いろ〳〵に書かれます、初夏の若葉の山がなつかしいものですから、わざ〳〵海を渡つて、南清地方から飛んで參り、森林の害蟲を取ることは、あの燕にも決して劣らないつもりです。

燕と申せば、あの鳥は大層巣を造ることが上手で御座いますが、私共はお恥しいことには、巣を造ることも出來なければ、從つて子供を育てる法も知らないのです、かう申せば貴方方は、一寸首をお傾げになりませうが、併し世の中は實に方便なもので、あの聲のよい鶯は、心もよい鳥ですから、私共に代つて雛を育て〻呉れるので御座います。

ですから私共は、産卵の時節になりますと、方々尋ね廻つて鶯の巣を見つけ出し、こつそり自分の卵を産みすて〻置くのですが、鶯は馬鹿なのか親切なのか、夫れを自分の卵だと思つて、熱心に溫めて呉れます。

所が私共の子供は、なか〳〵力が強いのですから、間もなく鶯の雛を蹴落

してしまつて、自分ばかりがお旨しい御馳走を貰ひ、至つて安全に成長致します、勿論かう云ふ道理に外れた事は、貴方方のお耳に達するのも、何だか耻入つた次第で御座いますが、之も自然の運命で致し方もないのでせう。

夫れから私共の仲間に、郭公と云ふものが居ります、其鳴音がカッコー〳〵と聞える所から、こんな名が付いたのだと申しますが、世人の中には、矢張り私共の別名の樣に心得てる人もあるさうですが、私共と郭公とは、其性質や形狀は似て居るものゝ、全く別種の鳥ですから、左樣御承知置きを願ひます』

と話し終つて、杜鵑は深く森の奥の方に飛び去つたから、二人は更に其後を追ふて、涼しい森蔭を、奥へ〳〵と分けて行くと、流石に晝も小暗き森の、いろ〳〵美しい蛾の類さへ飛び交し、小さい草の頭には、愛らしい花が咲いて、幽香を吐く有樣に、思はず見惚れて杖を止めると、其所には又、實に奇怪の事實を見出したのである。

六〇　食蟲草の物語

生存競爭は、どんな所にでも行はれて居る、此の人も通はぬ森の奥に、僅かに根を張つて居る一本の小さき草は、恐しい利器を持つて、動物を捕つて食ふのである、草が動物を食ふのは、あまり見かけぬ現象なので、二人は暫時其來歷を聞かうと、吾から進んで立寄つたのである。

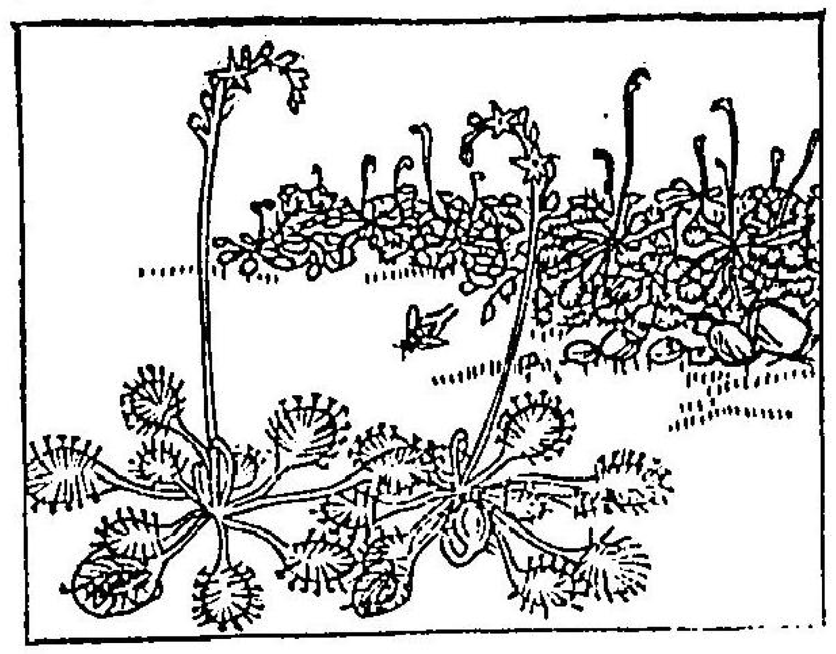
すると此の食蟲草は、性質に似氣なき優しい聲をして云ふやう、

『オ、よくこそ尋ねて來て下さいました、私共は名を毛氈苔と申しまして、肉食植物の內では、最も普通のもので、御覽の如く杓子狀をなす葉面上には、夥しい毛を生じて、其先の紅色を呈して居る所には、美しい透明な液を漏し之が日光に輝いて、キラ〳〵しますから、其澤山に生じて居る所は、まるで赤い毛氈を布いた樣に、實に美しいものです。

で草の間を飛び交ふ蟲が、此の有樣を見ましたら、屹度こゝへ來て、一寸で

も翅を休め度く思ふのですけれども、一旦止つたが最後私共の毛から漏れて出る液が、直と捕へてしまつて、どうあつても離さうとは致しません、夫れは丁度黐にかゝつた小鳥も同樣で、翅をバタ〳〵やればやる程、餘計に液が付けばかりか、毛も亦運動を起して、次第々々に蟲の體を包むのですもの、どうしたつて遁れつこは御座いません。

夫れに此の粘い液には、ペプシンと云ふ醱酵分と蟻酸と云ふものが含まれて居りますから、僅か一日と經たない內に、もう其蟲の體は、殆ど消化されてしまつて、だん〳〵葉の面から吸收せられ、不用の部分は棄て去られます。



かうして先づ一匹の蟲を、都合よく食ひ終りますと、葉の面の毛は、再び元の如くに開いて、美しい液を漏らすので、私共は、かうして人にも知られずに

森の奥の、淋しい所で繁殖して居りましても、お旨しい御馳走に飽くことが出來ますから、餘程幸福な身分だと云はなければなりません。

又私共の仲間には、『いしもちさう』だの『みゝかきぐさ』だの『うつぼかづら』だのと、いろ〳〵御座いますし、夫れに水の中に居るものでは『たぬきも』だの『むじなも』だのが有ります、『うつぼかづら』の外は、大抵どれも之も、小さなみすぼらしい形をして居りますが、自然の神樣が、兎も角こんな申し分のない武器を與へて下されたことを、私共は心から、感謝しなければなりますまい』と、毛氈苔は、大得意になつて語つた、二人は此の物語に、少なからぬ興を得て、其二三株を土産にするために、特に採集したのである。

六一　蚯蚓の物語

暫くして森を抜け出た二人は、或る藪蔭の畑地に來て、一人の怪しき風體の男が、頻りに土を搔き廻して居るのを見たから、何をするのかと、其側へ寄つ

て見ると、此の男は漁夫なので、今や魚を釣るために、餌にする蚯蚓を搜して居るのであつた。

見ると漁夫の畚の中には、太い蚯蚓がウジャ〳〵と蟠つて居る、蚯蚓は目が見えないから、二人の居るのに氣付かう筈なく、互に勝手な事を喋つてるのだ。

『ア、詰らない事になつてしまつたなア、己達はこんな哀れな身分でも、日本の農界のためには、相當に手柄もして居るのだに、兎角百姓は己達に對して好意を有たないのが癪で堪らぬなア』

と云へば他の一匹が其尾について、

『併しもう少し辛抱するさ、己達はかうして慘酷な犧牲になるものゝ、子孫の代になつたら、或は多少優待されるかも知れない、全體植物の成育を助けるよい土壤は、先づ己達の手？になつたことを知つて貰ひ度い、沙漠を除いた外で全地球上に、兎も角植物が茂るのは、大抵己達の働きの賜物と云つてよいさ、何しろ地中に居て、朝から晩まで土を食ふのは、廣い世界に己達ばかりだ。

尤も土を食つたとて、別に甘いこともないが夫れには二つの目的があるので、一つは其お尻から出した土で、自分の棲所を造るのと、今一つは土の中に交つて居る、腐敗有機物を食つて、體の營養にするのだ、こんな仕事で一生を終るのかと思ふと、馬鹿々々しいと覺ることも有るよ。

人間は兎角細い所に目が屆かない、けれども己達は、平均千坪の地面に四萬五千匹宛の割合で棲んで居る、もしも此の多數の仲間が、ストライキでも起さうものなら、人間界にも大恐慌を來たすことは知れきつてる。

さて己達が、地中から地上に向つて送り出した土の計算をしたのは、ダーウヰンとか云ふ豪い先生なさうだ、何でも此の人は、動物や植物のことに就いては細かい研究を積んで、未だ之まで世の中に知られて居ない事を發見したと云ふが、何でも其ダーウヰン先生の説によると、己達の吐き棄てた土を、平面にして、十年たてば二インチとなり、六十年後には一尺になると云ふことだ。

己達の壽命は短かい、十年も二十年も迚も生きてることは出來ないが、かう

云ふ豪い先生があつて、ちやんと其働きを認めて下されるのだもの〻安心して漁夫の餌になられると云ふものさ。

夫れから又人間の内には、己達がよい聲を出して鳴くと云ふが、之は眞赤な嘘で、蚯蚓が鳴くと云ふ道理がない、つまり人間の觀察力が足らないから、螻蛄の鳴くのを己達だと思ひ違へてるのだ、土の中に棲んでるのは、いつも蚯蚓ばかりと思ふのは、愚も又甚しいではないか』

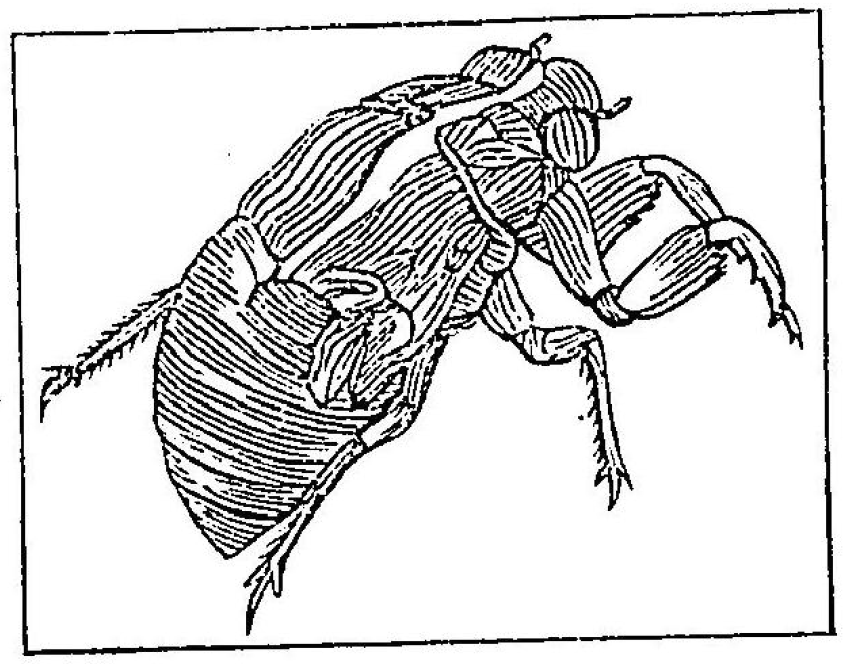
など〻蚯蚓は、形態に似合はぬ大氣焔を、泥と共に吐き散らして、漁夫の畚にのたくり廻つて居た、二人は蚯蚓の氣焔に、少なからぬ利益を得て、更に行手の道を急がうとすると、傍の大木に、早くも生れ出たか、一匹の蟬が、高音を漏らして居る。

六二　蟬の物語

新しく生れて來た蟬は、希望に輝く目を光らせつ〻、先づ徐ろに二人を見下

して、愉快なる物語をはじめた。

『お聞き下さい、私は今日はじめて地中から生れて來たのです、私の親は一昨年の夏に、私を卵として、木の幹に産みつけて置いたのですが、私共の約束として、孵化すると共に、地中の暗い所に潛り込まねばなりませんでした、そして木の根が縱橫に蔓つて居る所で、少しの日光も見ずに、私共は二十四ヶ月の長い間修行をして來たので御座います。



かうしてやつと成長を遂げて、いよ〳〵蛹になりますと、土の中から出て來て、むかしなつかしい木の幹に上り、土の付いた汚い皮を脫ぎ終りますが、はじめは翅も縮んで居て、思ふ樣に飛ぶことも出來ません。けれども夫れも僅かの內で、忽ち翅が伸びて固くなるが最後、勝手に何所へでも飛んで行つて、ジージー鳴き立てます、尤も鳴くのは雄ばかりで、雌は少

しも鳴きません、雌のことを、俗に唖蟬と云ふのは之が爲めで、雌は雄の鳴くのを、只默つて聞いて居るばかりで御座います。

鳴くと申せば、私ばかりでなく、『きり〴〵す』でも『すゞむし』でも、或は亦其他の鳥類でも、雄は鳴き役で、雌が聞き役ですが、貴方方は夫れならばなせ雌は鳴かないのだ、女だからよい樣に思はれるが……と仰しやるでせうが、全體鳥や蟲が鳴きますのは、決して人が音樂を奏する樣に、自分が樂しみを得るために鳴くのではなくて全く雌を呼びよせる爲めであります。

かうして私共が木の幹に止つて、ジージー鳴いて居ますと、其聲をきゝつけて、雌がやつて參りますから、其所で都合よく交尾を致しまして、卵を産むので、私共が此の世の明るい所に壯健で居りますのは、僅に二三日に過ぎません、即ち此の短い時間の内に、私共は卵を産んで置かなければなりませんから、隨分と忙しい思ひをします。

尤も二年の間の苦しみを、僅か二三日の樂しみに換へると云ふことは、貴方

方の目から御覽になりますると、定めし遺憾のやうにも思し召すでせうが、私共の身にとりますると、之が又相當に長いので、別に殘念とも何とも思はないのです。

次に私共の鳴く器械ですが、之も『きり〴〵す』などの樣に、翅を摩擦て鳴くのではなく、胸と腹との間に、立派な發音機が取り付けられてあります、で雌か雄かと調べるには、其發音機の有無に御注意下さいますれば、直に見分けが付くので御座います。』

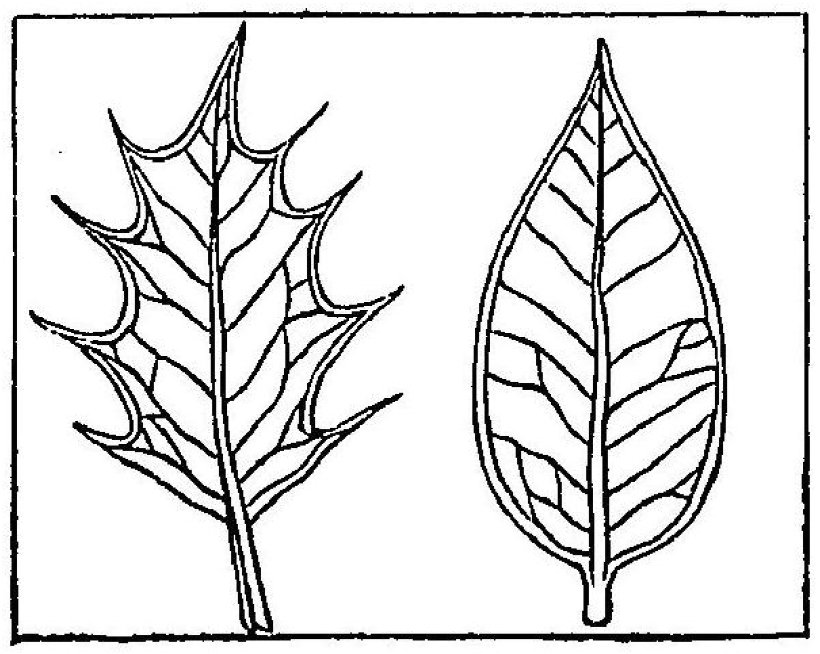
と、云ふかと思ふと、雄の蟬は、ジージー鳴きながら、別の枝に移つてしまつた、今に其聲をきいて、彼の雌が尋ねて來るであらう。

六三 柊の物語

森の茂みを出た二人は、大分山路を歩いたから、何所かで暫く休み度いものだと思つたが、都合よく一軒の立場茶屋を見付けたので、不取敢店先の椽に腰

を下し、初夏の農家の野邊をば、心ゆくばかりに眺めた。

此の立場茶屋の生垣には、柊が青々と茂つて居る、此の木は節分の縁起で、誰も知つてるが、二人は先づ殊更に、其痛さうな葉に目を注ぐと、早くも柊は



口を利いて云ふやう、

「よく御覧下さいました、私は他の草木とは違ひまして、冬になつても葉が落ちない代りに、春から秋へかけましても、大した發展をしませんから、誰も見向いても呉れないのです。

併し私共の葉には、一寸他のものに見られない猛烈な棘がありますから、人でも獸でも、之に觸れやうものなら、夫れこそ皮膚を破られてしまひます、あゝ、私共はどうしてこんな恐しい葉を有つて生れたのでせう。

私共の葉は、肉が厚いだけに、獸類が喜んで食べさうですから、自然の巧み

は、先づ私共に此の猛烈な刺を生じさせて、獸の食害を避けさせたものと思はれます、即ち其證據には、私共が充分に成長して、最早や獸類の口の届かない位に延びますと、如何な猛烈の刺も、次第に其姿をかくして、普通のやさしい葉になつてしまひます。

ですから御覧下さいまし、私共の一本は、其上の方にあるのは普通の葉で、下の方のが恐しい刺を持つて居ますので、何の事はない一本の木で以て、二樣の葉を見ることが出來るのです、本當に面白いではありませんか。

聞けば京都の加茂の社の内に、柊神社と云ふ、奇妙なお宮があるさうで、人が何か心願をかけて、一本の木を植ゑますと、其願が叶ふと共に、植ゑた木は屹度柊になつてしまふとかで、柊神社は其名の通り、境内が柊ばかりだと申します。

こんな不思議な話は、貴方方にお話しするのでは御座いませんが、つまり前に申した通り、柊は其大きいのと小さいのとで、自ら二樣の葉を有つて居るこ

とが解れば、柊神社の柊も、矢張り其類に相違ないと、早くも合點なさいませう。

　柊には棘のあるのです、けれども柊は本來棘のないもので、其之あるのは、唯一時の現象に過ぎないと云ふことは、充分に貴方方にもお分りになつた事と思ひます』

と、柊は刺々した口調を以て、巧みに自分の來歴を話して聞かせた、すると此の時一羽の白鳩が何所からともなく飛んで來て、茶屋の庇に休んだ、聞けば之は、茶屋の主人が、久しく飼ひ馴らして居るものだと云ふ。

六四　鳩の物語

　よく馴れた鳩であるから、人を見ても恐れず、早くも二人の前に來て、其可愛らしい目で見上げながら、

『お耻しう御座いますが、私共の身の上を、少しく聞いて戴きませう、私共の

羽毛は滑かで絹の如く、其姿は何となく處女に似てるなどゝ申されますが、其割に聲はよろしく御座いません、小さな頭、細くて短い嘴、ウンと張り出した鳩胸、これが先づ人樣に可愛がられる點なのでせう。

　私共は巣を造ることが至つて拙で、卵を温めますにも、雌と雄とが交り合つてやりますからして、生れた私共の子供は至つて弱々しいものですから、兩親の心配と骨折りとは、他の鳥類に優るとも、決して劣るやうなことはないのであります。

　夫れに私共は、なるべく不消化のものを與へたくないものですから、砂嚢の中よりして、一種の乳の如き汁を出して、子供を養ふので、かう云ふことは、全く他の鳥類には見ることが出來なからうと思はれます。

　日本の習慣としまして、身分ある人や財産家の人が死なれますと、放鳥と申しまして、私共や雀などを、大きな籠に入れて、夫れを墓場で放す樣なことが行はれますが、私共はどんな遠い所からでも、屹度元の葬儀屋の家へ歸つて來

てしまひます、之が私共の性質ですから、どうも仕方が御座いません。

既に私共は、こんな性質のものですから、傳書鳩として、むかしは軍用に供せられました、近頃は無線電信など〻云ふ、重寶な器械が發明せられましたから、私共には殆ど用がなくなつてしまひましたが、時には意外な大功を樹てた事も決して少くはないのであります。

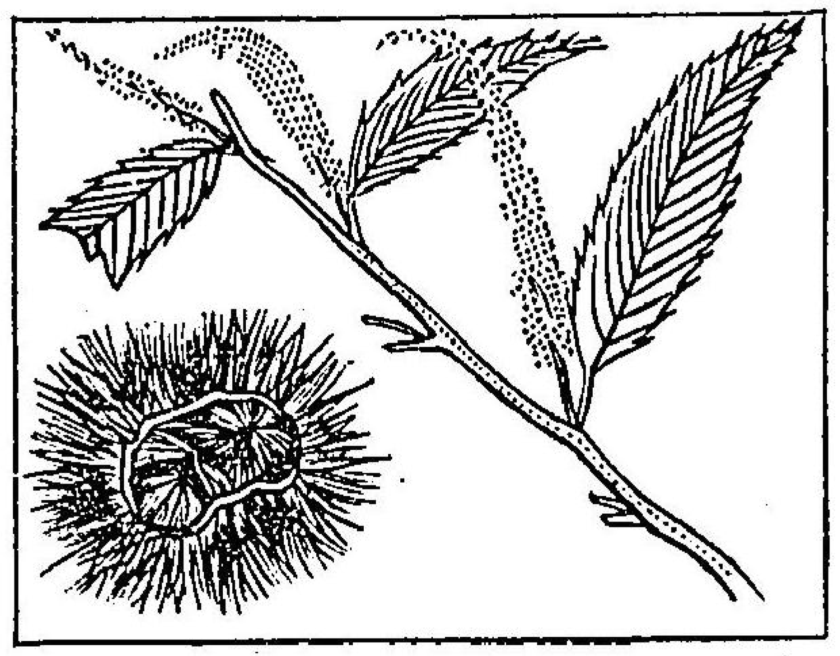
又私共は、根が弱い鳥で、敵に對しては、何の防禦も有つて居ませんし、夫れに野生のものは、肉の味が大層よろしいとかで、年々盛んに狩獵されますから、一味の徒黨は、次第々々に減つて行くばかり、思へば前途が心細うてなりません』

と、鳩は弱い鳥だけに、さも淋しさうな聲を出して、やがて又屋根の上へ歸つて行つた、二人は暫くぼんやりして、澁茶をがぶ〳〵飲みながら、四邊の景色に目を呉れて居ると、大木の栗の枝から聲が起つた、見ると今しも、其花が開いて、吹く風に花粉を漂はして居る。

六五　栗の木の物語

青々した鮮かな葉の間から、三寸ばかりの穗を抽いて、や〻黄色な花を咲いて居る栗はかう云つた。

『私は猿蟹合戰の昔から、貴方方にはお近しくして戴きます、御覽の通り此の一つの穗には雄花と雌花とが咲きますが、雌花の方は割合に少くて、穗の本の方にばかり咲き、雄花はゴチャ〳〵と澤山咲いて、長い穗になつて居るのです。



さて雄花が散りましても、雌花の方は散らないばかりか、だん〳〵大きくなつて、やがて立派な栗の實となりますので、實は外側にチク〳〵して、痛さうな毬果がありますが、學問上でかう云ふ外皮を殼斗と申します。

私共の實は、御承知の通り大層旨いものですから、鳥や獸が喜んで食べますので、これを豫防するために、痛々しい棘を生して居るのですが、やがて秋になつて、充分に成熟すれば、毬果は自然に口を開いて、實を落すので御座います。此の實は二つのもありますし、三つのもあります。時には一つのも、亦稀には四つあるのも御座いますが、四つもあるのは、どうも其發育がよくなくて其中の一つや二つは、屹度秕になつて、只厚い皮ばかりで、少しも食べる所がない樣なものになります。

栗の實の皮は堅果と云ふ位で、非常に堅いのです、併し此の堅い皮の下には俗に澁皮と言つて、今一枚の薄い皮があります、此の皮は澁皮と申す位で、大層澁いもので御座います。

さて之を縱に割つて見ますと、二片の厚いものが双方から密着して居ます、此の厚い二片は、貴方方が旨い〳〵と云つてお上りになるもので、學問上から申しますと、子葉と云ふのです。

子葉には、多くの澱粉と砂糖とを含んで居りますから、夫れで貴方方の滋養にもなりますが、之は丁度卵の白味と黄味のやうなもので、私共の子供が成長しますときに、まづこゝから養分を取るために、親が殘して置いたものと云つてもよろしい。

こゝで私共の子供は、此の厚い二枚の子葉の間に、小さな芽がありますが、之がだん〳〵成長して、遂には此の通り、見上げるやうな大木になります、併し其大木も、初めから勝手に地中の養分を吸ひ取ることが出來ませんので、特に養分の多い子葉の必要が起つたので御座います』

と云つた、栗の話は大層要領を得て居たから、二人は大いに喜んで居ると、今度は其傍の美しい紫色の大きな花を咲いたあやめが聲をかけた。

六六　あやめの物語

紫色の鮮かな『あやめ』は、何を喋らうとするだらう。

『私の花の形は何に似て居ますか、心と云ふ字に似て居るでせう、だから世の人は心字花などとも申します、面白いことには、此の花の形が、餘程他のものと異つた所が御座いますので、貴方方が之まで、御覽になりました、櫻や菜の花とは大分趣が違つて居ます。

即ち私共の蕚と花冠とは、其區別がはつきりして居ませんで、都合六片の花蓋と呼ぶものから組立てられてあります、そして外側の三片は大きくて、内側にある三片は、至つて小さいものです。

所が此の外側の三片は、他の花に照らして見ると、蕚に當るもので、内側の小さい三片は、正しく花冠に相當しますが、どちらも美しいものですから、何れを蕚、何れを花冠と明かに見定めることが出來ない所から、花蓋などと云ふ特別の名で呼ばれて居るのです。

さて貴方方は、此の花蓋の内部を御覽になりますと、幅こそ狹く御座いますが、矢張り花冠の形をした、三片のものにお氣付きなされませう、之が即ち私

共の雌蕋の柱頭に當ります。

此の樣に雌蕋は、ありありと見えましても、雄蕋の方は、何處にどうして居るのやら、貴方方にも、容易にお判りにならないのでせう、勿論判らないのも道理で、雄蕋の居場所は、此の雌蕋の柱頭を起して見なければ、決して判りません、さあどうか御遠慮なく見て下さい、雄蕋は其下の方に、小さくなつて附着いて居ります。

又花蓋の下部の、三角形をした子房を、横に切つて見ますと、中は三部に分れて、其子室には多くの胚珠が扣えて居ります、やがて花が凋んで、子房が成熟しますると、果實の皮は三つに裂けて、種子を四方へ飛び散らせますが、かくて私共の責任は、そこに終るので御座います。

『あやめ』の親族は、決して少くはありません、花菖蒲、鳶尾、蝶々花、杜若などは、一般に世人に知られて居ます、そして之等のものは、鳶尾科と云ふ大きな一族をなして、殆ど春の末に、相前後して花を開き、此の通り晩春から初

夏の天地に一段の光彩を添へるのであります』と、『あやめ』は、宛然演説でもする樣に、滔々として辯じ去つたので、二人は非常に愉快を感じて、いよ〳〵此の立場茶屋を出て、前途を急がうとすると傍の竹塀の陰から、幽なか聲をして、モシ〳〵一寸お待ち下さいと呼びかけるものがある、何だらうと思つて振り返つて見ると、之は他の者でもない、一匹の蝸牛であつた。

六七　蝸牛の物語（上）

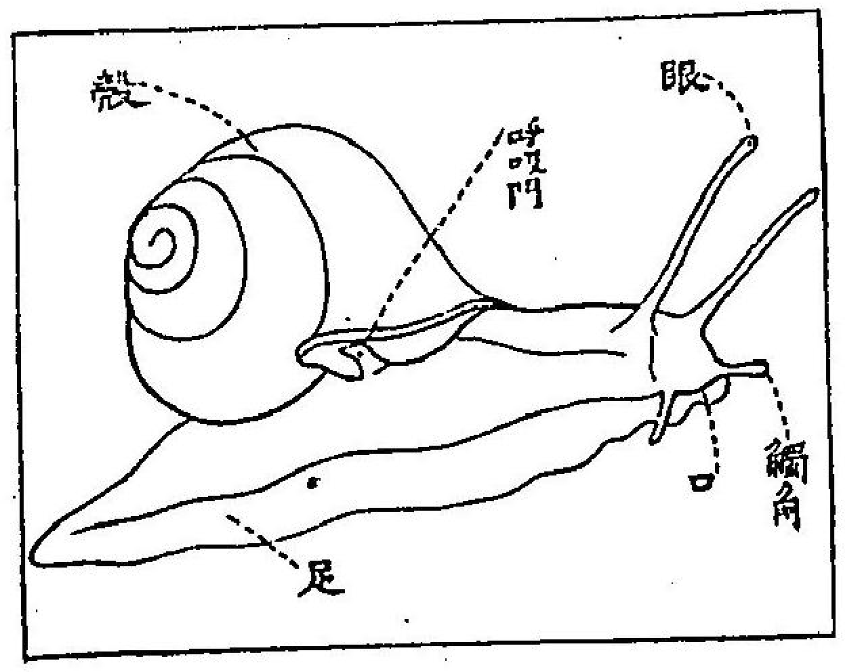
遲鈍なる蝸牛は、其長い角をふり動かしながら、次の如くに物語るのであつた。

『何からお話し申しませうか、先づ何は兎もあれ、私の頭を見て下さい、二本の長い角と、短い二本の角とが御座います、長い二本の尖の、半透明をした所には、一つ宛の小さな黒點が有りますが、此の黒點こそ、取りも直さず私共の

眼で、角の樣に見えますのは、眼を出張らせた柄であります。

私共は、こんな出張つた眼を有つて居ますから、定めし遠方までも見ることが出來るだらうと思し召しませうが、實は甚だ眼力の鈍いもので、僅かに五六寸の先を見る位なもので御座います。

けれども、又方便なもので、長い二本は短い二本と共に、觸角の用をもしますから、貴方方が若し私共の居る前へ、急に筆の先かなんか付きつけでもなさいますと、私共の眼ははつきり、夫れを認めない迄も、長い角も短い角も、忽ち體の中にかくれてしまつて、外からは、少しも見ることが出來なくなるでせう。



私共の口は、短い方の觸角の下に御座いまして、其口の中には、鑢の樣な細かな齒が、一面に生えて居ます、貴方方は曾て雨に濡れた、古い板塀を御覧に

なつたことが御座いませう、そして其所に細い怪しげな紋の織り出されて居ることにお氣づきなさいましたでせう、之は私共が、板塀の表面について居る、有機物を削りながら、嘗めて進んだ其痕跡が、かうして殘つたので御座います。

私共は前に申しました如く、眼の力が充分でない上に、歩くことも下手ですから、時々高い所から、眞逆樣に落ちることが御座います、其時下が草原か何かで、柔かな場所ならば、別に怪我も致しませんが、岩や石の上に落ちやうものなら、夫れこそ一大事で、忽ち大切な殼を破られてしまひます。

けれども其所へ行くと私共は又頗る暢氣なもので大して痛いとも苦しいとも思ひません、即ち一旦破損した殼は、間もなく元の通りに出來上りますし、角などは鋏で切られましても、不自由に思ふのは、ほんの暫くの間で、やがて又見事に生えて、元の如くになつてしまひます。

夫れから私共の腹には、肉質の大きな足が御座いますが、如何にも之ばかりは無格好なもので、思ふまゝ頭の下面から、殼の後方にまでも此の足を伸ば

して、波を打たせながら、ゆる〳〵歩いて居る態は、間の拔けたもので、本當にお恥しい次第で御座います。

併しこんな哀れな身分でも、だん〳〵子孫が繁殖して、雨降りの時などには、隨分多く貴方方のお庭先なんぞへ這ひ出します、之は一つは私共の保護色が、敵の目に見付からない樣な風に出來て居るからでも御座いませうが、夫れよりも私共の生活力の強いことが、子孫の繁殖を助けて居ると云つて宜しい、其實例は即ち次に申し述べませう』

と、云ひつゝ、蝸牛は更に言葉を改めたのである。

六八　蝸牛の物語(下)

面白い蝸牛の話に、二人は深く釣り込まれて、思はず膝を進めて聞いた。

『さて私共は、殼を破れば殼が出來、角を切れば角が生えて、再生力の強いことは、天下に並ぶものなしと云つてもよい位ですが、殊に夏の暑い折りに、天

氣が長く續きますと、私共はもう其炎天の下に、ウカ〳〵して居ては、體の爲めにも宜しくありませんから、破れ瓦の下や、草叢の間にかくれて、雨が降つて來る迄、幾日も〳〵何も食べないで待つて居るのです。

尤もかう云ふ時には、薄い膜で以て、殼の口を封じ、小さな孔を一つあけて其所から僅に呼吸を續けるのであります。又冬の寒い時節には、此の膜を二重に拵へて、春まで命を續けますが、別に寒いとも苦しいとも思ひません。

序ですから、面白いことを一つお話し致しませう、或る西洋の學者が、一匹の蝸牛を捕へて、少しも水氣のない、博物館の戸棚の中へ入れて置いたさうです、捕へられた蝸牛は、飛んだ災難で、どうすることも出來ずに、前後七年の長い間、其まゝ蟄居して居たと云ひます。

所が先に、蝸牛を入れて置いた學者は、七年過ぎた或る日、不圖此の事を思ひ出して、戸棚から取り出し、まさかもう干からびて居るだらうとは思ひましたが、夫れでもどうだか知れないと云ふので、適當の水と溫度とを與へてやり

ましたら、驚くではありませんか、其蝸牛はムク〳〵と動き出して、七年前と同じやうに、角を張つて歩いたと云ひます。

そこへ行くと甚だ失禮な申し條では御座いますが、人樣は存外に弱いものだと云はなければなりますまい、手足の指一本失くしても、片方の目を失つても、生活上に少なからぬ不便を感じませうし、又一日中食物を口にしないと、體が疲れると仰しやるではありませんか、私共は身體各部の再生力が強いばかりでなく、五年六年と長い間、一杯の水も食物も口にしないでも、平氣で居るのですもの、此の點ばかりは、聊か自慢してもよろしからうと思つて居ります」と、蝸牛は大氣焔を吐き散らして、二人を驚倒せしめた、併し彼の云ふ通り、人間は指を失くしたら、もう二度とは出來ないが、蝸牛は身體のどの部分を切られても、何とも思はないのは、確かに大豪傑と云つてよいと、彼の勇氣を褒めてやると、蝸牛はます〳〵大得意で、例の如くよち〳〵這つて歩いて居た。

六九　孑孑の物語

此の立場茶屋の背後には、大きな汚い溝があつて、其中には夥しい孑孑が、熱心にウヨ〳〵動いて居る、併し二人は、かう云ふ小さな物にも目をつけて、觀察するのであつた。

すると孑孑は、S字形に體をふり動かして、ヒソ〳〵と物語るやう、

『私共が、今に此の汚い水の中を出て、蚊と云ふ名前を付けられますと、兎角貴方方の御勉強のお妨げを致しますが、只今では却つて社會の利益を圖つて居ると云つてもよからうと思ひます。

何によらず、害と益とは必ず相伴ふもので、私共の如きも、一見無用の長物の如くに見られて居るかも知れませんが、又分相應の功がないでもありません先づ私共の頭部を御覽下さい、二本の細長い觸角は、休まずに動いて居て、其食餌のある場所を知らうと力めて居ます、又腹端を御覽下さいますと、其所に

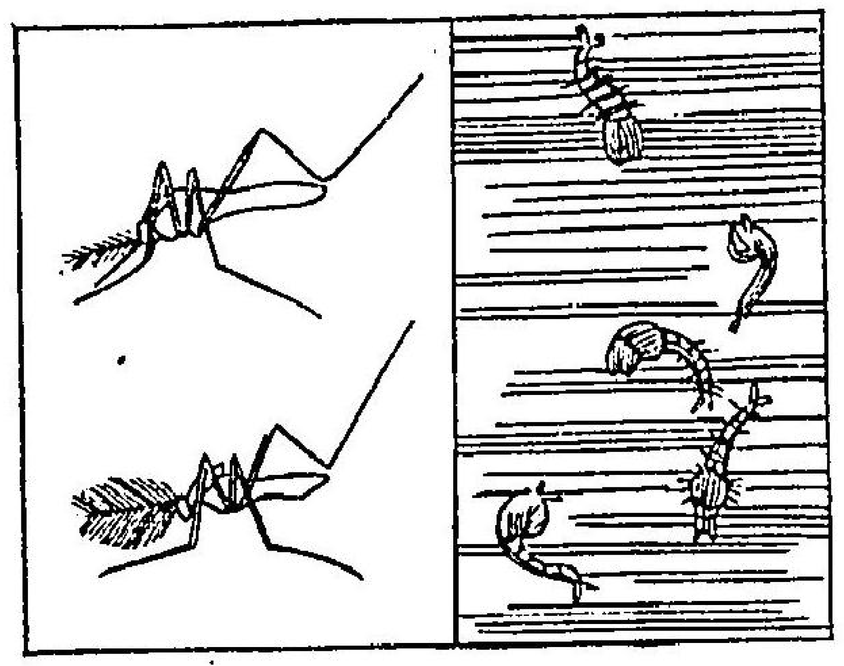
は二つに岐れた尾の如きものが御座いまして、空氣を呼吸する用に供されてあります。

すべての動物は、大概頭の方から呼吸をしますが、私共ばかりは尻の方でやります、で水面に浮んで居るのを御覽になれば、屹度此の二本の呼吸管を上の方へ突き出して居るので御座います。

かう云ふ不思議な形をして居る私共は、腐れた水の中に居る有機物をば、ドシ〳〵食ひ盡して成長しますから、從つて人樣の最も恐しく思召す病氣の黴菌の如きは、大半私共の口で、食つてしまふ勘定です。

蚊を退治するには、孑孑を滅すが第一だなどと云つて、溝の中へ石油の類を撒き散らす人が御座いますが、斯くの如きは、其本末を誤つた話で、成る程孑孑は夫れで死に絶えてしまひますが、今度は各種の黴菌が、恐しい勢を以て繁殖しますから、忽ち惡臭を放つ樣になりませう、故に私共は夏の衞生上にいくらかの功があると云ふ事を、お掬み取り願ひ度いものです。

さて此の樣に、腐水中の黴菌を食つて、だん〱大きくなりますと、今度は皮を蛻いで、鬼孑孑と云ふ者になるので、之は又餘程面白い形をして居ります鬼孑孑の口は、何所にも見ることが出來ません、蓋し最早や食餌を採る必要が御座いませんので、口は失くなつてしまつた譯です、又頭部を見ると、實に不思議な一對の角の如きものを生じ、之を水面に抽き出して、呼吸をして居ります、世に鬼孑孑と云はれますのは、全くかう云ふ所からつけた名で、實は私共が蚊になるとての準備をする蛹時代であるのです。



鬼孑孑は、暫くして今一度、其汚い皮を蛻ぎますが、今度はもう水中の客ではないので、即ち其皮を舟の如くにして、翅の充分に乾くまでは、水の上に居りますもの丶、既に翅が充分に固まりますと、ピーンと一聲高く鳴いて、人畜の血を吸ふのです、サアかうなると、折角之まで水中

の黴菌を驅除した立派な手柄も、何の爲めにしたのやら判らず、貴方方の御勉强の邪魔になる樣なことがあるのですが、之も自然の命令ですから、何とも致し方が御座いません』

と、云ひ終らぬに、一匹の瘦せた蚊は、早くも櫻花少年の腕に止つて、其血を吸はうとしたのである。

七〇　蚊の物語

失敬な奴！と、櫻花少年は、拳をあげて、一撃の下に打ち潰さうとしたが、又思ひ返してわざと其まゝにして置くと、蚊はさも悲しさうな聲をして、『赦して下さい、今日は血を吸ひに來たのでは御座いませんから……孑孑の成れの果だと思し召したら、あまり憎んでは下さいますな。

あの孑孑に翅が生えますと、みんな此の樣な物になります、尤も人畜の血を吸ひますのは、必ず雌の蚊で御座いまして、雄の方の蚊は少しも血を好みませ

んで、却つて甘い物に集る癖があります。

雌の方でも、血を吸ひに來れば、二つとない大切な命を取られることは、よく承知をして居りますものゝ、血を吸はないでは、産んだ卵が孑孑にならずに大抵途中で死んでしまひますから、殺されるは覺悟の前で、云はゞ冒險的、イヤ命懸けの仕事をするので御座います。

私共の雌雄、夫れはどうして見分けがつくのかと仰しやいますか、至つて容易いことです、即ち雌の方の觸角は、竹の節の樣な形をして、しかも各節毎に短い毛がある位で、さまで立派ではありませんが、雄の方の觸角は、非常に見事なもので、宛然念珠を連ねた樣な節々に、長い柔かい毛を生して居るばかりか、其基の所には、或る特別の仕掛けがありまして、自由自在に動かすことが出來るのです。

又雌の頭の兩側を御覧下さいますと、其所には夜の暗い時にでも、譯なく物を見ることの出來ると云ふ、大きな複眼が御座いますし、口は長く延びて、汁

液を吸ふに都合よくなつて居るのみか、針で刺す作用をも兼ねて居るのです。かう云ふ樣に、夜になつてから、人畜を襲ふ丈の準備は、立派に整頓して居るばかりでなく、いよ〳〵人の皮膚に、其恐しい針を突き刺さうとする場合には、口の兩側に毒嚢と云ふものが有りまして、其中の毒分を、先づ注射して置いて、夫れからソロ〳〵仕事に取りかゝりますが、實に其用意の至り届いて居ることは、自分ながら感心の他はないのです。』

と、蚊は初めに似合はず、盛んに手前味噌を並べたてゝ置いて、ピーンと立ち去つてしまつた。

二人は暫くあつけに取られて、茫然其後を見送つて居たが、あまり同じ所にばかり居るのも面白くないと云ふので、更に道を他に轉じ、農家の垣根を周つて居ると、怪げな獸が突然二人の前を遮らうとして、フイと立止つて此方を見た

七一　鼬の物語

憎らしい面をして、二人の顔をジロ〱見た小さな獸、之は他の物ではない鼬であつた、逃げ出すかと思ひの外、其場に止つて二人を迎へたので、其側へ寄つて行くと、

『よい所でお目にかゝりました、さア私の身の上を話しますから聞いて下さい私共の性質は、頗る勇猛な方で、自分より數倍の大敵と戰つても、必ず之を仆さなければ止まぬと云ふ點は、聊か鼬魂とでも云つて、誇るに足るかと思はれます。

そこで私共の最も好むものはと申しますと、先づ第一が鳥の卵で、雛鳥の腦や其血を吸ふことも大好きで、私共がよく鷄の雛を捕へることが有りますが、勿論肉を食ふのが目的ではなくて、生血が吸ひ度さにやるので御座います。

さう云ふ嗜好がありますから、私共は常に穴の中や板の隙間などをグル〱潜つて歩くので、體も從つて細長く、且つ柔かに、前後左右どちらへでも、自由自在に屈することが出來ます。

又同じ獸類の中でも、鼠位私共を恐れるものはありません、夫れと申しますのは、私共が一旦鼠を見付けたが最後、最も猛烈に追ひ廻しますし、よし又彼が穴の中へ潜り込みましても、猫ならば入れぬ所を、私共は、何の譯もなく入つて、片ッ端から摑み殺してしまひますから、夫れこそ殆ど逃つこはないのです。

併し世の比諭にも、窮鼠却つて猫を嚙むと云ふ如く、大いなる鼠と格鬪するのは、なか〱困難の仕事でありまして、時には空しく敗を招く樣なことがないでもありません、此の場合には、鼠の方でも一生懸命ですから、鑿の如くに猛烈なる齒を以て、私共に食つてかゝりまして、私共の方でも、專ら敵の首筋か頭に嚙みついて、一擧に敵を斃さうとしますから、其戰鬪の悲慘なる有樣はかの日露戰爭の、旅順攻圍戰を見る如き感がありませう。

此の如くに、いつも悲慘な戰爭をする私共は、遂に夫れに馴れて、兎角血を見るのを好み、時には食料にする目的がなくても、弱敵を襲ふて之を斃し、以て

て自ら快とする樣な次第です。
元來私共は、農家の敵として、百姓には蛇蝎視せられますが、鼠や野鼠を盛んに殺して、農作物の害獸を驅除しますから、寧ろ益獸として、農家は私共を保護しなければならぬかと思ひます』
と、さも勇氣あるもの丶樣に、重々しい口調で喋りながら、やがて彼方の垣根の間へ、其姿をかくしてしまつた。

七二　鼹鼠の物語

暫くして彼方から來た一人の百姓は、一匹の鼹鼠を持つて、頗る得意の樣子である、聞けば今、鼹鼠落しにかゝつたのだと云ふ、二人は鼹鼠に就いて何か尋ねやうとすると、彼は早くも口を利いて云ふやう、
『聞いて下さいまし、私は別に惡い事をするものではないのに、兎角お百姓に惡まれて、いつもこんなみじめな最後を遂げなければならないのです。

成る程私共は、畑の土を掘つて、トンネルを造り、其ために作物の根を浮かせますから、其所をお百姓が惜むのでせうが、云はゞこんな事は小罪です、どの樣な有益動物でも、多少の害は勿論伴ふものですもの、其位は大目に見て戴かなくては、本當に持つた所が御座いません。

で私共の大功と申しますのは、主として作物の根を食ふ虫…かの地蟲や螻蛄の類を盛んに食ふのですもの、實際はお百姓の無二の味方で御座います、若し夫れが僞りだと思召さば、試みに私共の胃袋を破つて御覽下さいまし、中にあるのは植物性のものではなく、根切蛆や螻蛄ばかりが、一杯になつて居るでせう。
次に私共の皮の毛は、他の獸類のとは異つて、殆ど體から直角に生えて居ますが、其譯は穴の中を進退するに都合のよい爲めで、萬一之が他の獸の如くに

後の方へ向つて生へて居ませうものなら、穴の中で急に退却しやうとするに、どれ丈困難を感ずるか知れますまい。

又私共の耳と目とを御覽下さい、耳には耳殼と云ふものがありませんし目も毛の中に芥子粒程の大さのが殘つて居て、云はゞ申し譯に過ぎないのです、平生暗い所にばかり生活する者には、目の必要はないのですから、私共には之で澤山です。

あゝ私共は、今や百姓の手にかゝつて、空しく撲殺せられます、最後に於て之だけのことを、貴方方のお耳に達して置くことの出來たのは、せめてもの思ひやりとしなければなりません、左樣ならおたつしやで……』

と鼹鼠は幽かな聲を殘して、百姓の家へ連れられて行つた、折りから木の枝で、夫れを嘲るのか、又悲しむのか、一匹の枝蛙は得意の節で、ギヤア〳〵鳴き出したのである。

七三 枝蛙の物語

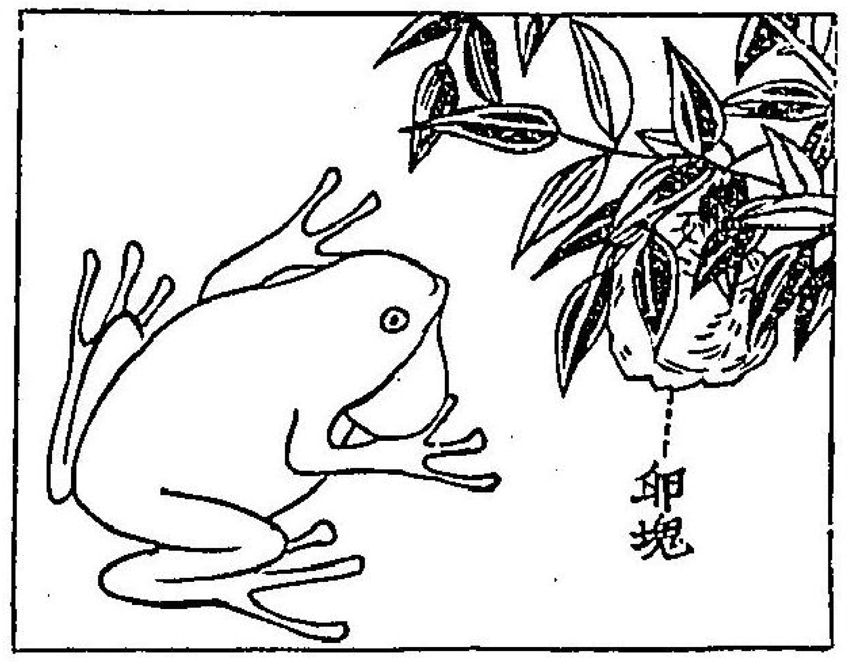
枝蛙は又の名を雨蛙とも云つて、雨の降る前に必ず鳴くのである、二人は此の聲をきいて『いやな蛙が鳴き出した、明日は雨かも知れない、雨が降ると思ふ樣に散歩も出來ないから、サア急いで行かう』と、足を早めると、枝蛙はモシ〳〵と呼び止めた。

『私共は雨の降る前に鳴くものですから、兎角よく云はれませんが、之と云ふのも、全く氣壓の高低を感じる事が、他の動物よりも鋭敏なからで、自分が雨を降らせるのでは決して御座いませんから、少しはお察しを願はねばなりません。

或る人が、雨蛙を以て晴雨計を拵へたと聞きました、何でも口廣の罎に私共を入れて、半ば程水を充たして置くので、晴天の日には、水面に浮いたりなんぞして居ますが、雨が降る前には得意になつて、ギヤア〳〵鳴きながら之を

豫報しますのに、殆ど外れつこはありませんので、一時は蛙の晴雨計と云つて大分にもてはやされたと云ひます。

私共の鳴くのは、あの殿樣蛙などゝは少し違ひます、鳴く所は同じですが、音を增大する器械の在る所が異つて居ますので、殿樣蛙の鳴く時には、耳の左右に大きな袋の如きものが出來ますが、私共では喉の下に出來、しかも夫れが只一つです。



枝蛙と名付けられる位ですから、私共は常に木の枝の上に居て、いろ〳〵の害蟲を捕つて食べます、從つて其卵も、水の中に産むのではなくて、木の枝の間に、ドロ〳〵した物を産んで、其中で蝌斗になるのです、夏の頃に水際の木の枝をお調べになれば、屹度見つかりませう。

枝蛙と云へば、青い色をして居るやうに定つて居るかと申すと、さうでもあ

りません、成る程葉の上に居る時には、青い色が保護色になつて、敵の目を避けるに都合がよろしいけれども、幹だとか石垣の上だとかに居ますと、青い色は却つて一層よく目立ちますから、さう云ふ所にばかり居るものは、別種の色彩を以て、巧みに敵の視界を脱れることに工夫をして居ます。

熱帶に居るカメリオンと云ふ蟲は、棲む所によつて、即時に體の色を變化させることが出來ると云ひますが、私共は夫れ程重寶な體では御座いませんけれども、兎も角體色を變化させる事が出來まして、生活上にどれ丈樂をするかも知れません、尤も體の色を、附近の物の色に似せて、敵の目から脱れやうとするものは、隨分多いので、葉を食ふ虫が、大抵綠色をして居るのを見ましても、其一斑は解るのです』

と、枝蛙はむづかしい學問のことにまでも說き及ぼして、滔々と辯じ去つた夫れも其筈で、彼は殊に辯舌が巧みだから……。

七四　花の物語

今二人の少年が歩きつゝある道の傍には、種々の草花が咲いて居る、すみれや蒲公英や蓮華草などゝ云ふ、春の花は少しは時機も遅れ氣味であるが、濃き色彩に染め出された夏の草花が頗る多いのである。

二人は思はずかう云つた『僕等は花を見る毎にさう思ふが、かう云ふ美しい色は、一體どこから吸ひ取られるのだらう、土を分拆して見たら、或は有るかも知れない』と。

すると道傍の花は、口を揃へて二人に向つた。

『成る程貴方方が不思議に思し召すのも御尤です、莖を割つて御覧になりましても、根を割いてお調べなさいましても、色の素は一寸判然しません、夫れと云ふのも、此の花瓣の彩色が、花瓣の中で、僅かの時間内に出來上るからで、云はゞ莟が花となつて開く、極く短い間には、最も大勢の職工が居て、一々夫

れを染めるのも同じで、其忙しさと云つたら有りません。

何事にも注意の淺い人達は、花の咲いたのを見て、マア綺麗だ、實に見事だとは云つて下さいますが、之迄に仕上げる工場の忙しさを、一向に見て戴かれないのは、如何にも殘念至極と云ふの外ありません。

かう申せば貴方方は、夫れならば花瓣の内で、どうしてそんな色が出來るのかとお尋ねなさいませう、併し之ばかりは、實はまだ秘密になつて居ますからこゝで手品の種を明かすことは困ります、人間の手ばかりでする工場でさへ、どうかすると門外の人には、見せない所がありませう、所が私共の方は、自然の工場ですから、一層其取締が嚴しいのです。

尤も私共は、葉の方より炭酸瓦斯を吸ひますし、根の方からは水に溶かされた、いろいろの無機鹽類を、盛んに吸ひ上げますから、花の色の原料も之等の物の外にはない筈で御座います。

夫れから、日光の力も、矢張り色を染め上げる上には大關係がありますので

充分に日光が射しませんでは、どうしても鮮かな色は出ないものと思はれます、こんな事を申して居る内に、自然の工場から口止めをせられた事なぞ、喋り出すかも知れませんから、殘念ながらこゝらで中止して置きます、いづれ又其内許しが出ましたら、改めてお話し申すかも知れません』

と、花は惜しい所で口を結んでしまつた、手品の種を見ると、案外約らぬものだから、矢張りこゝらが花だらうと、二人は一禮を殘して道を急いだ。

七五 啄木鳥の物語

此の時彼方の林から、コツ〳〵と云ふ怪しい響が起つて來た、二人は之を聞くと共に、何か大きな發見でもしたかの如くに、四邊の物には目も呉れないで一散に驅けて其林に入り、聲の起る所を、仔細に調査して見ると、他でもない一羽の啄木鳥が樹木の幹に穴を穿ちつゝあるのであつた。

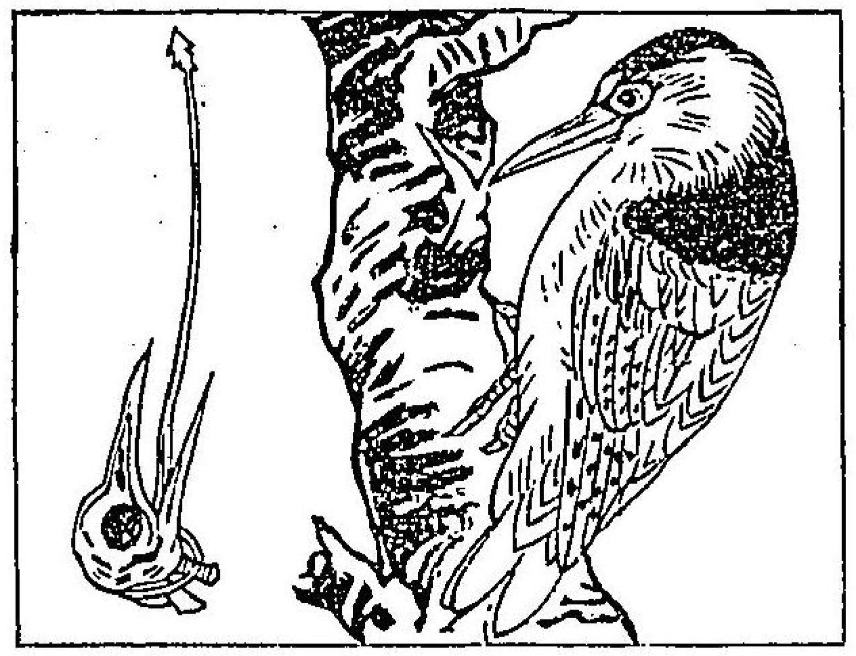
さて啄木鳥は、二人の來たのを見付けて、急に其仕事を止めて語るやう。

『わざ〳〵お出で下されて恐縮します、私共は通例枯木か、又は多少枯れかけた樣な木を搜索して、其心の中に居る虫を捕つて食べます、枯木の虫を退治るのは樹木の爲めには、大した利益がない樣に思ふ人もありませうが、併しかう云ふ虫が、今に成長しますと、他の生木を害しますから、さうならない内に、私共が取り盡さうと云ふのです。

私共の足は、御覽の通り、其二本の指が前に向ひ、他の二本は後方に向ひ、しかも爪は非常に鋭くて、眞直に立つて居る樹木の幹でも、容易に上つたり下りたりすることが出來ます。

又私共の嘴は、非常に鋭いもので、丁度斧の如き用を致します、樹木に穴を穿つには、實に持つて來いと云ふ構造ですが、猶夫れよりも巧妙に出來てるのは舌で御座います。即ち舌の尖端には、逆向の鈎が付いて居まして、樹木の心に居る虫を刺して引き出すのに都合がよろしい、尤も見付けた虫が、あまりに小さくて、刺すことが出來ない時には、舌の先にある粘液に附着けて、巧く

出しますが、之は丁度あの昆蟲の標本を作る人が、大きい虫をば留針に刺しますが、小さいのはタラカンドゴム液で、粘し付けるのと同じ樣なやり方のものなのでせう。



或る人の説では、私共が舌の尖で虫を刺して食ふなど丶は眞赤な嘘で、只嘴でコツ〱やつて居ますと、虫は其音に驚いて、急いで中から逃げ出しますから、其所を素早く捕へて食ふに過ぎぬと云つて居ります、成る程かう云ふ例もないでは御座いませんが、矢張り虫の逃げ出すのを待つやうでは、どうしても仕事が迂遠になりますから、此方から進擊するに越したことは御座いません』

と、云ひながら、啄木鳥は飽きもしないで、再びコツ〱やり出した。

二人は此の林の中に來て、何か他に研究するに足るやうなものはないかしら

と、其所彼所を捜し歩いて居ると、實に不思議々々々、珍無類の一物を發見したのであつた、

七六 冬蟲夏草の物語

櫻花少年は苔の間から頭を擡げて居る、怪しげな一植物を採集しやうとした時、此の不思議な事實に接して、俄かに叫び出した。

『何だ〱、妙なものがある、頭は草で體は虫で、虫の脊中から草が生えて居る』

と云ふと、此の怪しい、譯の分らないものは靜かに口を利いて云ふやう、

『もし〱其樣に吃驚なさらないでも宜しいでせう、私共は決して魔性の物ではなく名を冬蟲夏草と申しまして、一種の寄生菌に過ぎないのです、尤も種類によりましては、地虫に付くのも御座いますし、或は甲蟲を侵すのもありますが、私共は主として蟬の蛹を侵すもので、一に蟬菌など丶呼ばれますのも、又

之が爲めであります。

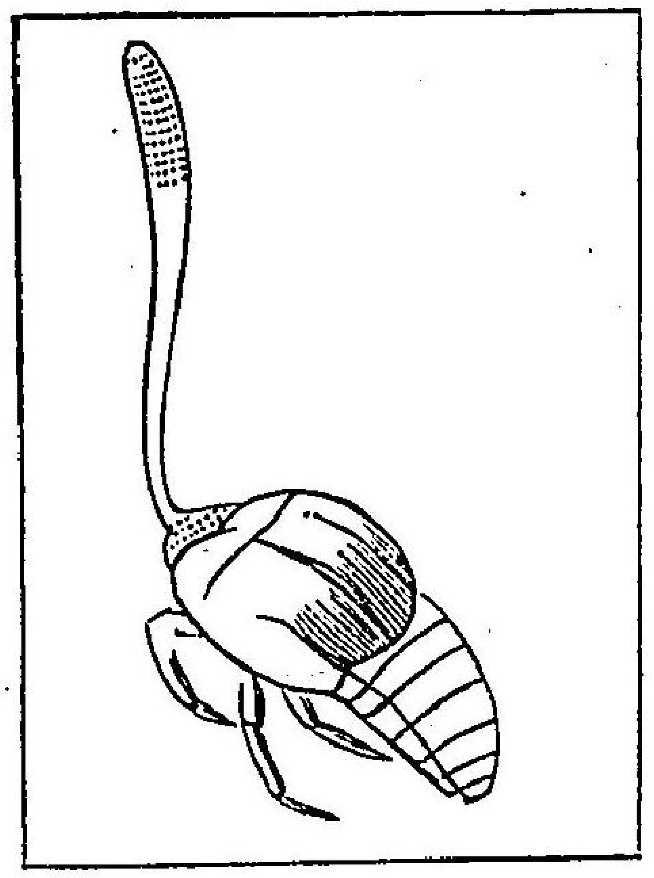
御覽になります通り、私共の體の先の方の、やゝ膨らんで居る部分には、夥しい胞子を含んで居りますが之が充分に成熟しますと、四方へ飛び散つてしまひます、そして此の飛び散つた胞子は、其後どう云ふ行動を採るのかと申しますと、決して地に落ちて生へるものではなく、必ず深く地中へ入つて、蟬の幼蟲體に附着かなければ承知をしないのです。

けれども蟬の幼蟲に逢ふ事は、餘程困難な仕事で御座いますから、本當に其目的を遂げて、子孫を發達させることの出來るものは、至つて少いと云はねばなりません。

さて幸にして、蟬の幼蟲を發見して、首尾よく其所に棲所を定めましても、當分は大した發展も致しませんで、只徐ろに時機の來るのを待つてるの外はないのです、所が一方寄生主の蟬の方は、夏が近付くと共に、ソロ〳〵地中から出る準備に取りかゝりますから、私共もウカ〳〵しては居られません、で俄か

に運動をして、自分達の成長と云ふことに、全力を注ぐのであります。

そこで蟬の蛹は、非常なる苦痛を感ずるので、丁度人間がペスト菌などに襲はれた樣に、激しい苦悶を續けて、とう〳〵死んでしまひます、私共はかうして先づ寄生主を斃して置いて、夫れから營養分を採り、俄かに大發展を遂げて、かく地上に抽き出すことが出來るので御座います。



かう云ふ次第で、私共の一生は、實にむづかしい生活をしなければなりませんが、其割合には、又いくらも目的を遂げるものがありまして梅雨頃の庭には、往々私共の仲間が列をなして、繁殖して居ることさへあります。

何しろ貴方方が不思議な魔物ぢやと思召す位ですから、觀察力の淺かつた昔の人が、冬蟲夏草など云ふ、奇妙な名をつけて、蟲が化けたものだと、一圖

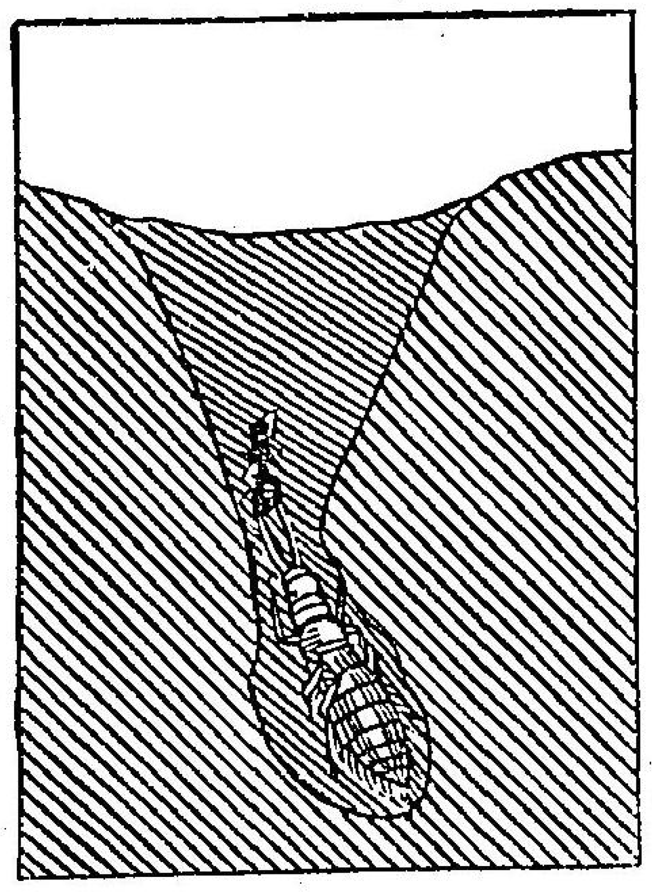
に思つたのも無理ではありますまい』
と、冬蟲夏草は巧みに自分の身の上を物語つた、そこで二人は參考のために標本函に收めて置き度いと云ふので、特に其許しを受けて、各々一つ宛此の奇態なる標本を持つて歸ることゝした。

七七　蟻地獄の物語

森林の晝は、死したるが如くに淋しい、只時々鶯が、思ひ出した如くに鳴き出すのと、谷川の水が、幽かなる音を立てゝ居るのが、僅かに寂寞を破つて居る。

二人は森の奥の、小さき神社の拜殿にまでたどり着いた、疲れた足を其所に休めたが、こゝにも聞くべき材料は、決して乏しくはなかつた、殊に拜殿の縁下の、乾き切つた土の面に、綺麗な擂鉢狀の穴を穿つて居るのは、如何なる物の棲所であらうと、二人の好奇心は丁寧に之を掘つて見ることゝなつた。

すると其中から、さも不平らしく聲をかける者がある。
『誰だ、失敬な、己の棲所を無斷で掻き廻すとは怪しからぬ』
と、云ふので、二人はおかしさを忍びつゝ、猶も掘つて見たら、中から土色の蟲が、大きな鋏を擡げて、コロリと出て來たが、二人を見るなり、急に悄げ返つて、



『御無禮な申し條はお許し下さい、實は敵かと思ひまして、とんだ不覺を取りました、私は名を蟻地獄と云ふ位で、かうしてこゝに穴を穿ち、蟻や其他の小さな蟲共を陷入れて、片ッ端から此の鋏で嚙み殺すのが、毎日の仕事で御座います。かう見えましても、私共は文明の戰術を知つて居りますから、蟻の様な智慧もあり力もある蟲を、何の譯もなく斃すことが出來るので、かの日露戰爭の時に、露西亞軍は我日本軍を防ぐために、狼穽と云ふものを設けて、其中へ我兵

土を陥入れたと申しますが、丁度私共は、其露軍同様に、狼穽を設けて、強き蟻を待つので御座います。

さて私共も、思ふまゝ蟻の血液を吸つて、充分に成長しますと、やがて蛹になりますが、蛹になつてしまへば、最早や蟻を殺す必要も御座いませんから、従つてさしも見事であつた此の狼穽も、風雨の曝すに任せて、全く其姿をかくしてしまひますが、併し中にかくれて居る私共は、此の間にも少しも休まずに次第々々に進歩をして、やがて皮を脱いだが最後、今度は咬蜻蛉と云ふ、蜻蛉に似た蟲になつて、方々飛び廻るので御座います。

貴方方が、若しも私共の生活狀態を、詳しく知り度いと思召したら、試みに乾いた土を盛つた箱の中に入れて御覧なさい、私共は其時に、だん〳〵後退りをして、體を土中に隠すと共に、頭部にある鋏を以て、絶えず土を反ねかへして、間もなく美しい擂鉢狀の穴を掘り、其中にかくれて、蟻の來るのを待つでせう、けれども若しも貴方方が、いつ迄も餌物を下さらないで、其まゝに

放棄つてお置きになりますと、私共の體は無慙にも、穴の中で干枯らびてしまひます。

猶私共の一身が、遂に貴方方の生活にまで、障害を及ぼす様な大事件が御座いますから、夫れを次ぎに申し述べませう』

と、蟻地獄は得意の鋏を振つて、意氣軒昂たるものがあつた、二人は之に興を催して、さて何事を此の小さき蟲が喋り出すであらうかと、いよ〳〵足下に注意したのである。

七八　恐るべき物語

蟻地獄は一應其身の上話をして、一寸息を休め、又話を續けた。

『私共が好んで食はうとする蟻は、成る程智慧者には相違御座いませんが、一體蟻と云ふものは、かの綠蚜蟲と云ふ害蟲を、庭園の薔薇や楓や梅などの若芽に移植して、盛んに害毒を流させますから、矢張り間接の害蟲と見做さなけれ

ばなりません、貴方方が折角丹精してお作りになつた花木に、一旦かの綠蚜蟲が、蟻の口に運ばれて、移り棲まうものなら、夫れこそ實に由々しき一大事で花は之が爲めに、全く萎むの外はないのです。

所が此の蟻と綠蚜蟲の二役者に、鷄と私共とが交つたなら、更に〱面白い關係が出來まして、遂には之が貴方方の生活上の問題になるから不思議ですから申せば、貴方方は、屹度目を圓くして吃驚なさいませうが、若し私共がお庭の木の下に、例の狠穽を設けて居ましたなら、蟻は綠蚜蟲を啣へて、いざ木の上に行かうとする、其途中に於て、殆ど殘らず狠穽中に陷つて、死んでしまひませう、さア蟻が死んでしまへば、綠蚜蟲は、いくら繁殖しようとしても手助けする者がなくなつて、遂に蟻と運命を共にし、之も又悉く滅びてしまひますから、お庭の木は、何の害も受けずに、綺麗な花を開くことが出來るのです。

所が貴方方の家に、若しも鷄が居ましたら、彼は其性質として、盛んに土を

掻き廻して、蟲を捕るものですから、如何に私共が、極力蟻を食ひ止めやうとしましても、鷄の強い嘴に敵對することはどうしても出來ず、空しく全滅するの外はありますまい。

かうして私共が、鷄のために全滅すれば、蟻は最早や何の恐るゝものもありませんから、俄かに非常なる勢を以て、綠蚜蟲を移殖させますから、お庭の樹木は、之が爲めに急に勢ひを失ふでありませう。

してみれば、お庭の樹木の本當の敵は、確かに綠蚜蟲に相違御座いませんが之に大いなる力添へをする蟻は、殊に憎むべき蚜探とでも申しませうか、所が私共は、其蚜探とも云ふべき蟻を、片ッ端から食ひ殺して、お庭の樹木に加勢を致し、以て綠蚜蟲の驅除に、間接の力を添へて居ります。

すると又貴方方の愛養なされる鷄は、蟻は少しも食はないで、却つて其蟻を食はうとする私共を、ドシ〱攻撃するではありませんか、して見れば綠蚜蟲が繁殖するのは、鷄の罪であると云はなければなりません、鷄さへ居なければ

私共はお庭の樹木の下で、安全に生活して、蟻を食ひ盡すことが出來るのであります。

所が其鷄は如何と申せば、毎日大きな卵を産んで、貴方方の營養を助けて居ますから、萬一之を殺してしまはうものなら、夫れこそ貴方方は、完全なる身體を、永久に保つことが出來ない事となりませう。

斯くの如く生物界のことは、極めて小さい樣な問題でも、だん〴〵追究して觀察しますと、意外に廣く。そして大きい問題となると云ふ一條、何とお解りになりましたか』

と、蟻地獄は滔々たる懸河の辯舌を振つて、暫時は二人を煙に卷いたのである、併し二人は、之が爲めに、大いなる學問をしたのを喜んで、いざ立ち去らうとすると、拜殿の天井から、絲を垂して、一匹の蜘蛛が舞ひ下つた。

七九　蜘蛛の物語

蜘蛛は猛惡な面をして、ジロ〴〵と二人を見下しながら、徐ろに喋り出した

『蟻地獄は緣の下に穴を掘つて、敵の來るのを待つて居ますが、私共は又天井に網を張つて、矢張り獲物のかゝるのを、じつと待たねばなりません。

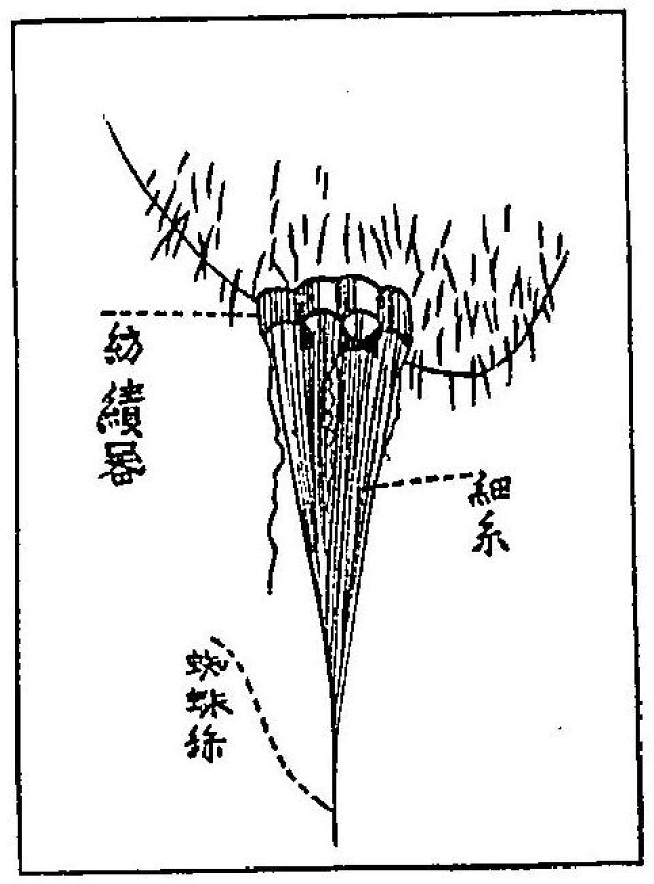
さて私共は、昔から形の醜い有害蟲として、一般の人に忌まれたものですが注意して御覽下さいますと、貴方方にはよい材料を供する物と云つてよろしい蜘蛛の種類は中々澤山御座いますが、私共は仲間の內でも殊に綺麗なもので、俗に三番叟蜘蛛と呼ばれて居ります。

其譯は、腹の所に黑と黃との模樣がありまして、夫れが芝居でやる三番叟の帽子によく似て居るからです、で私共は體が美しい爲めに、敵が發見してよりつかない恐れがありますから、體の近所には、白色の太い線を作つて、自分の所在を晦ますことに工夫をして居ります、從つて此の白い線は、毎日形を變へる必要がありますので、中々忙しい仕事をするのです。

自分の性質ばかり申し上げましては、徒らに時間を過す恐れがありますから

ます。

一般の蜘蛛類に就いて、少しくお話しすることゝ致しませう、全體私共の體は、昆蟲の類とは違ひまして、頭胸部と腹部との二つから成り、腹部には八本の足があります、そして又頭には、八個の單眼を備へ、口には毒腺を有つて居ます。



私共の專賣とも云ふべき糸は、極めて細いもので、しかも非常に強いので、其體內にある時には、一種の穢い粘液で御座いますが、一度績ぎ出して、空氣に觸れたが最後、直に固まつて絲となるので、自分ながら夫れには不思議と思ふの外はないのです。

どうして私共は、腹の內の粘液を、絲として績ぎ出すかと申しますと、之には尻の端に突出して居る、六個の紡績器械を用ゐるので、此の紡績器械には、丁度篩の目のやうな、夫れは〳〵細い無數の孔が開いて居る、して其所から出

る澤山の絲が、合して一本となるので、私共の絲が細い割合に、強い力を有つて居るのは、全くかう云ふ譯なのでありませう。

次に貴方方もお氣付きなさいましたでせう、一つの網の中には殆ど二匹の蜘蛛の居た例しが御座いません、私共は自分の子供をば可愛がりますものゝ、決して他の仲間は、側へも寄せ付けないのです、勿論子供にしましても、少しく大きくなつて、獨り立を致しますと、最早や側に置くこともしませんで、ドシドシ追ひ出してしまひます、かう云ふ譯であるから私共はいつでも、一巣の中に一匹しか居ないのであります』

と、蜘蛛は時計の振子の如くに、其身を絲に托しながら、風に搖られて居たが、やがて又天井の方へ、だん〳〵上つて行つてしまつた、見ると彼方の崖の上には、紅い〳〵躑躅の花が、宛然山姫の簪かとばかりに、美しく咲き亂れて居る。

八〇 躑躅の物語

紅い躑躅が、綠の葉の中に咲いてるのは、物凄い樣な感じがするのである。二人は其側に行つて見ることを躊躇せざるを得なかつた、すると躑躅は遙か彼方から、早くも聲かけて呼ぶので、二人は其聲につれられて行くと、彼は嬉しげに說き出すのであつた。

『躑躅と云ふ字は、木ともつかず、草冠もなく、思ひもよらぬ足篇の字を當てられたのは、先づ貴方方の不思議に思し召す事かと存じます。併し之には深い仔細のあることで、私共の仲間に、蓮花躑躅と申すものは、樺色の大きな花を開いて、なか／＼見事な躑躅では御座いますが、非常に猛烈な毒分を貯へて居ることも、一般に知られて居ます。

殊に此の蓮花躑躅を、羊が來て食べますと、忽ち毒に當つて、躑躅して死んでしまふと云ひますが、こんな所からして、躑躅と云ふ文字が出來たのでせう

併し之は支那の古い書物に出て居ると、曾て或人に聞いたことで、事實如何はよく存じません。

こんな文字の穿鑿は兎も角、私共の花は大抵橫向きになつて居て、しかも其上方に當る三片には、黑い鮮かな斑點が付いて居ます、此の斑點は何の爲めに出來てるのかと申しますと、他でもない、蟲が蜜を吸ひに來る時に、其目印しとなるためで御座います。

黑い斑點を目印に、飛んで來た蟲は、他の二片の、斑點のない所を踏臺にして花の底にある蜜を吸つて行きます、此の時私共の雄蕋からは、粘氣のある花粉が、恰も念珠の樣に繫がれて、續々として吐き出され、蟲の體や足に附着いて、他の花へ持つて行かれ、こゝに所謂異花受精と云ふことが、巧みに行はれるので御座います。

又躑躅の餅と云ふものがあります、昔の人は世が末になると、種々の木に餅が成るなどゝ申しますが、私共の葉や枝に、餅の膨らんだ樣な球が出來ますの

は、決して世が末になつて、餅を生じたのでは御座いません、即ち之は躑躅の餅病と申しまして、一種の寄生菌が生じ、其刺激によつて、だん〳〵膨脹して球となつたものに過ぎないのです。

此の餅病が起りますのは、花時のやゝ終り、即ち五月頃に最も多いので、はじめは綠色の鮮かな光澤を帶んで居ますが、日を經るに從つて、だん〳〵白くなり、果ては粉を吹いた樣に見えます。

此の餅はやゝ酸味を有つて居ますから、子供の食べ物にされる事も御座いますが、時によると、烈しい中毒を起すことがありますから、まア食べないに越したことは御座いません。』

と、躑躅は夫れから夫れへと話を進めた、二人はやゝ暫く岩角に踞して、靜かな山間の空氣を呼吸して、非常に清涼の感を覺えた、此の時を見て、何所からともなく、突如として、二人の名を呼ぶ者があつた。

八一 空氣の物語

誰が呼んでるのかと、前後左右を見廻して見たが、何所にも姿を見せぬ、しかも其聲は直ぐ二人の前から來るので、『誰だ〳〵、僕等の名を呼ぶのは？』と、大きな聲をして尋ねると『お判りにならぬも御尤もです、私共は空氣ですもの』と云つて笑つて居る。

さて空氣は、猶も言葉を續けて、

『一わたりお話し申し度いと思ひます、昨日から左樣思つて居ましたが、餘りにお忙しい樣でしたから、ツイさし扣えて居つたので‥‥全體私共は、無色透明の瓦斯體で、全地球を包むばかりか、地球の表面上數千哩の高所にまで擴つて居ります、併し私共が、凡そ何千哩の高さにまで達して居るかと云ふことは充分に判つては居ない樣です。

されば昔から、多くの學者が、其高さを研究されましたが、實際空氣の存在

するのは、四十哩位のもので、又空氣を組成する所の分子は、數千哩の高さに迄擴がつて居ると云ふ事に決しました。勿論之とても、實際行つて見たのでは御座いませんから、確かなことは判らないのでせう。

さて又空氣を組織して居るものも、元は酸素と窒素と云ふ、二つのものに過ぎない樣に思はれましたが、段々研究が進むに從つて、アルゴンと云ふ一種の瓦斯體の含まれてる事が判りました。

元來私共は、化合物ではなくて、混合物で御座いますから、酸素と窒素とアルゴンとは、夫れ〴〵一定の割合で、空氣を組成して居りますが、猶此の空氣中には、炭酸瓦斯だの、オゾンだの、或は硫化水素だの水蒸氣だの、塵埃だのが、時と所の異るに從つて、夫れ〴〵多少含まれて居ます。

全體瓦斯と云ふものゝ内には、非常に恐しい有毒のものが御座いまして、砒化水素などは、其泡の一片でさへ、大切な人命を奪ふと云ふことです、併し空氣中に含まれて居るのは、そんな恐しいものではありませんが、無水炭酸、酸

化炭素、硫化水素の如き、古井戸などの、空氣の流通の惡い所には、往々それ等の有毒瓦斯が潜んで居て、貴重なる人命を奪ふ樣な例も、少くはないのであります。

次に空氣中に塵埃の多いことは、私が今事新しく申し上げませんでも、よく貴方方も御承知の事と存じます、分けても都會地の空氣は、此の塵埃のために餘程不潔なものになつて居るので、即ち一立方センチメートルの中に、五十萬の塵埃を含んで居る如きは、敢て珍しい事ではないので、其中の四分の三は、岩石の細片、他は澱粉、馬糞、纖維、羽毛、動物植物の破片及び黴菌の類であります』

と、空氣は意外にも恐しい問題を演べて、二人に注意を與へた、此の時恰も空氣に含まれて居た、小さな〱一つの黴菌は、蚊の鳴くよりも小さな聲をして、何事をか訴へやうとしたのである。

八二　黴菌の物語

『空氣は色もなく、形もなく香ひも御座いませんが、私共には色も形もあります、併し其形は實に小さなもので御座いますから、貴方方の肉眼では、迚も見ることが出來ますまい、小さいものゝ事を、微塵などゝ申しますが、私共の體は、其微塵よりも猶小さいのですもの、顯微鏡にかけて御覽になりませんではどうしても解りますまい。

　一口に黴菌と云ひますと、悉く人樣の害をするものゝ樣に思はれて居るのは如何にも心外千萬な事で、中にも酒の醱酵菌や、根粒バクテリヤや、若くは種種の食用菌類、即ち松茸椎茸の類も、矢張り私共の味方ですもの、徹頭徹尾嫌はれては、少々恐れ入ります。

　一體黴菌と云ふものは、濕つた土地にはよく發達しますが、之に反して乾燥した所では、どうしても思ふ樣に成育することが出來ないのです、尤も濕つた

所には、塵埃の少ないもので、從つて其所に生存する黴菌は、乾いた所よりも遙かに少いと云はなければなりません。

　私共が乾燥しますと、芽胞と云ふもの……云はゞ種子の如きものを生じますが、之は又非常に風に散り易い性質のものですから、乾燥した空氣中に、芽胞を含むことが多いのも、爭ふことの出來ない話です。

　さてかう云ふ種類の黴菌の中には、食物其他の物に取り付いて、腐敗を起させるものが大部分を占めて居りますが、中には又最も恐るべきペスト、結核、チブスなどゝ云ふ病氣の元となる所の、所謂病素菌をも含んで居るのは、寒心に堪へない事です、併しかう云ふ病素菌の中でも、コレラ菌などゝ云ふものは乾燥したが最後、忽ち死んでしまひますから、乾燥せる空氣中に交つて居るものは、殆ど其傳染力を失つて居ると見做しても、差支はなからうと思ひます。

　此の樣に多くの病素菌は、常に空氣中に交つて居て、機會があつたら人樣の身體に宿り、以て大いに發展しやうと思つては居るものゝ、貴方方の身體には

よく之に抵抗して、打ち勝つだけの、立派な武器が具つて居ますから、さまで心配はないのであります。

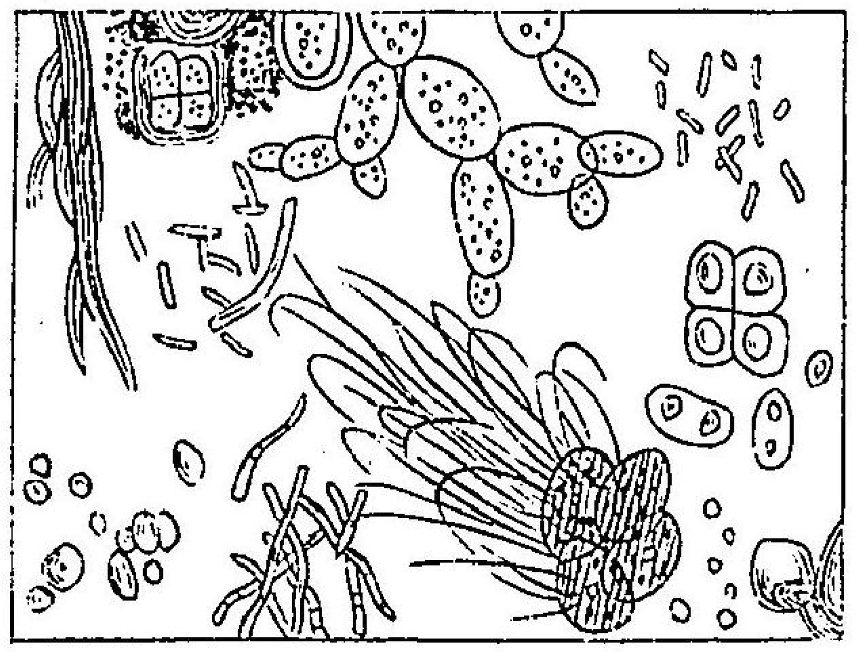
即ち人間の氣管には、氈毛と云ふものがあつて、呼吸の場合に、一旦吸ひ込んだ黴菌や塵埃をば、ドン〱外部に反ね返してしまふから、餘程よい機會がないと、黴菌は目的を遂げられません、併し寒冒などで、氣管の粘膜が常の樣に働かない時には、黴菌の乘ずべき、最もよい機會ですから、貴方方もなるべく風邪を引かない樣に、平生からお心がけになつたがよろしいでせう。

猶私共が、如何に多くの味方を有つて居るかと云ふことを、次に改めて申し上げることゝ致します』

と、黴菌は一通り話して口を結び、更に又語り續け樣とした、さて今度はどんな事を云ふのだらう。

八三 古紙幣の物語

『最も多くの人の手に觸れたものは何であるかと尋ねたなら、貴方方は古き紙幣の如きも、其一つにお數へなされることゝ思ひます、所が或る人の研究したのを見ますに、此の紙幣の面には、約五六種の黴菌が棲んで居て、各々繁殖を圖り、恰も群雄割據の狀態を呈すると云ひます、御參考のために、紙幣の一部を顯微鏡下に照した所を御覽に供しませう。



佛蘭西のミケルと云ふ學者は、空氣中に於ける黴菌に就いて、餘程詳密なる研究をした人で、其調査の結果を聞きますと、比較的空氣の清潔なる田舍に於きましても、日本の三尺三寸立方の面積に、約四百四十五個の生物があると云ひ、巴里市の如き、繁華なる市街地では、同量の空氣中に、約三千四百八十箇を算へたさうで、特に同市の或る古い家の一室内に於ては、前記の量の中に七萬九千の巨數に達した所があると云ふことで、聞い

だけでも、アツト驚くの外ありません。

ミケル氏は猶雨水の中にある黴菌に就いても調査をしました、永く晴天の打ち續いた後に、一雨の降る時は、其雨水の中には、最も多くの黴菌が含まれて居るので、即ち五合餘の水中に二十萬の生物が居たとは、全く嘘の樣な話ではありませんか。

ミケル氏の調査された巴里市では、一年を通じて、最も黴菌の少いのは十一月で、此の時期には、五合餘の雨の中に、一千箇の黴菌を認めたに過ぎないさうですが、最も多い九月では、實に六千九百八十箇、即ち約七倍の多きを見た譯です。

故に巴里の近傍では、一年を通じて、雨のために、地上に叩き落される黴菌が、三尺三寸四方毎に、四百萬個以上に達するであらうと云つて居ります、思ふに巴里の如きは、道路の設備がよろしいにも拘らず、猶こんな多數の黴菌が空中に浮んで居ます、我日本の都會の如きは、すべての衞生狀態が完全して居

ないにも拘らず、夥しき人口を含んで居ますから、定めし巴里よりも、より以上多くの黴菌が浮游して居て、種々の危害を試みやうとして居るに相違ありません。

夫れは兎も角も、古き紙幣や、古本、古着の類には、最も恐るべき病素菌が殊に夥しく繁殖して居ますから、貴方方も充分に御注意あり度いものです。

近來都會の旅舍、飮食店などでは、便所で手拭を使用することを禁じてありますが、之は傳染病の豫防としては、實によい事と思はれます、便所の手拭は最も不潔なもので、從來とても、之から恐ろしい病氣が傳染したと云ふことは寡聞なる私共でさへ、チヨイ〳〵耳にして居りました。要するに黴菌は、形こそ小さいもの丶、其勢力は決して侮ることが出來ませんから、之を有利に用ゐる方法を講ずると共に、病素菌の如き、恐るべきものに對しては、出來得べきだけ、豫防をしなければならないのであります、左樣なら方々、又の機會にお目にかゝりませう』

と、挨拶したが、二人の目には對手の顏さへ、はつきりとは見ることが出來なかつた。

さても二人は、之より何れの方面に向ふべきかと、やゝ暫時躊躇して居たが間もなく一匹の美しい甲蟲が飛んで來て『サア私が御案内を致しませう』と云ふではないか。

八四　道しるべ物語

妙な事を云ふ蟲だと、二人は深く其擧動に注意をすると、蟲は『お疑ひも御尤もです、私は道しるべと呼ばれる程で、いつも人樣の道案内を致します』と云ふ。

『夫れならば吾々は之から水邊に行き度いと思ふから、宜しく頼む』と云ふと道しるべは、宜しう御座います、では歩きながら話すことゝ致しませう、と彼は早くも口を開いたのである。

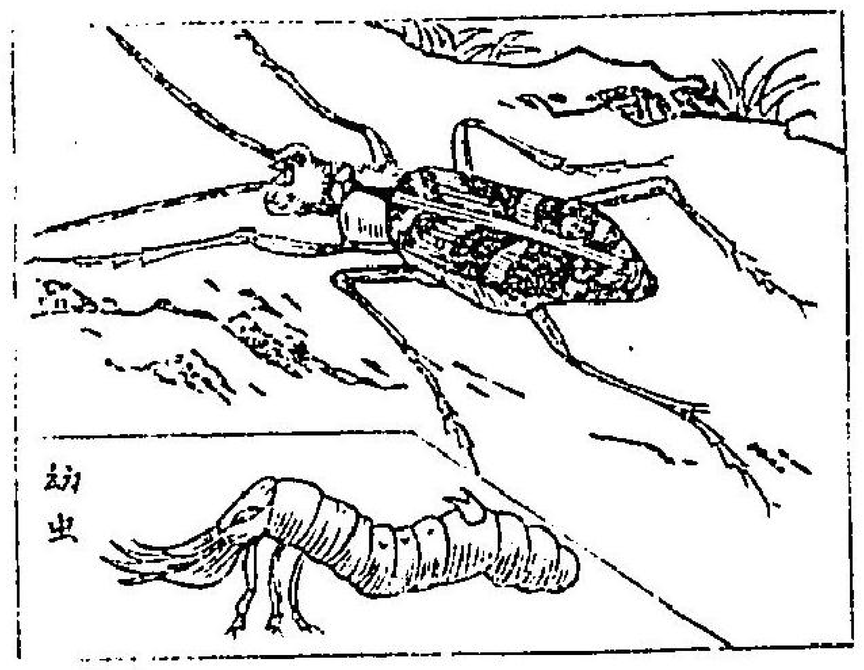
『私共は夏の暑い日に、最も乾いた道路を好んで棲むもので、人樣がおいでになりますと、じつと其近付くのを待つて居て、殆ど其足で踏まれやうとする時に、はじめて翅を開いて飛び立ちますが、夫れも遠い所へ行くのではなく、やつと五六間先まで飛んで又止り、人樣のいらつしやるのを待つので、如何にも其擧動が、道案内をする樣に見えますから、從つてこんな名を頂戴したので御座います。

尤も私共は、人樣に先立つて、五六間先に靜止して居ましても、必ず頭部を人樣に向けて、絕えず其擧動に注意をしますから、假令先方に害意がありましても、私共は滅多に殺される樣なことはないのです。

私共の種類には、ハンメウ、ヒメハンメウ、ニハスズメなどがありますが、其習性は大抵似たり寄つたりのもので、かく私共が、道から道へと飛んで、草原や濕地へ行くのを好まないのは、一體どう云ふ譯かと申しますと、夫れは他でもなく、私共の好んで食べる虫は、草原や濕地に棲んで居るのではなくて、

主として乾いた地面に居るからで御座います。

農家の害蟲を捕へて、絶えず食べる私共は、かの蜻蛉の類と共に、親子共に益蟲と呼ばれて居るので、私共の子供は路傍の砂地や、乾いた土地に、縦穴を



掘つて棲んで居ます、穴の深いものでは、一尺以上に達することも御座いますが、其穴の内面は、極めて滑かなもので、穴の附近の地面には、少しの塵も殘さないばかり、清潔にして置きますから、多少注意して御覧下さいますなら、直に夫れと解りませう

私共の子供は、かう云ふ綺麗な穴の中に、靜かに身を置いて、強く鋭き口を上方に向けて、餌物の來るを待つて居ますから、何も知らない小蟲が、一度其附近に來やうものなら、有無を云はせず引捕へて、穴の底まで持て行かれ、夫れこそ骨も殘さずに食はれてしまふのです、併し困つた事には、此の穴を見付けられますと、惡戯な子

供が、小蟲を餌にして、私共の子供を釣り上げ、とう／＼殺してしまふことです』

と、道しるべは猶も其身の上話を續けやうとしたが、早くも目ざす池の邊に出たので、こゝで二人に暇乞をして、再び元の道へ引き返してしまつた、彼も今度は獨りで、道案内をするのだらう。

八五　みづすまし物語

廣い池の面には、種々の水草が花を開いて居るし、多くの水棲昆蟲や魚類が絶えず浮沈するから、なか／＼賑かで、從つて見るべく聞くべき材料も豐富である、二人は何から話の口を切らうかと思つて居ると、水面に浮んで居る『みづすまし』は目敏く傍へ寄つて來て、其先鞭をつけたのである。

『私共は、あの目高と同じ様に、いつも水面に渦を巻いてグル／＼運動して居ますから、誰にも知られて居ます。殊に流れの早い川よりも、かうした靜かな

池の方が、私共には棲み心地が宜しいので、どこの池にでも私共の姿を見ない所は、殆ど無いと云つても宜しい位です。

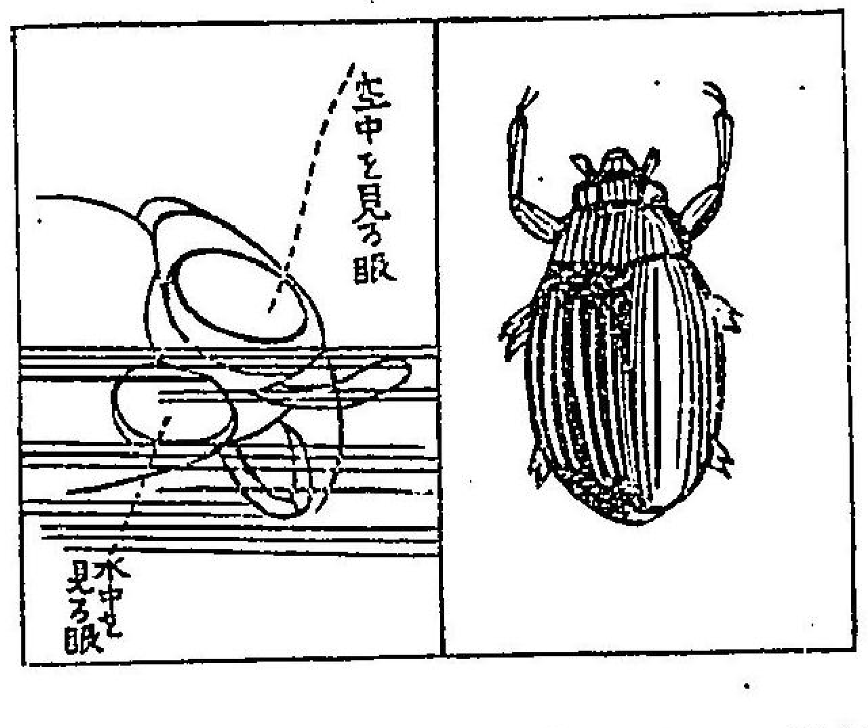
併し私共は、いつも池の水面にばかり附着いて居る樣な、そんな意氣地なしでは御座いません、即ち夜になると、空中に飛び出して、電氣燈などに集ることも無いではありませんが、空中に居りましては、こゝの如くに、思ふ樣に食物を採ることが出來ませんから、矢張り私共のためには、池に居た方が利益なのです。

私共の體に就きまして、特に貴方方の御注意を願ひ度いのは、其目の構造で御座います、即ち他の蟲類の目は、左右に一對の複眼が有りますが、私共の目では、左右の背面と腹面とに、各一對宛御座いますから、都合四個の複眼がある樣に見えます。

なぜ私共に限つて、かう云ふ不思議な目を有つて居るのかと申しますと、他でもありません、腹面にある目では、常に水中を見、背面にあるは、空中を見

ると云ふ有樣で、一時に上下を見ることが出來ますから、どんな敵が來やうとしても、少しも恐れないのであります。

私共は夏の中こそ、こんなに威勢よく廻つて居ますものゝ、秋の末になつて



池の水が冷たくなりますと、もう食物もなく、運動にも不便ですから、地底の泥の中に潜り込んで、春まで眠ります、されば冬の頃に、強く地底の泥を搔き廻して御覧なさい、私共は驚いて其姿を現はしませう。

敵が來て、若しも私共を捕へやうものなら、一種の臭氣を發して、之を擊退しやうとします、此の臭氣は體の關節から出るもので、乳の樣な液汁で御座います』

と、みづすましは餘念なく、物語を續けて居たが、急に體を轉じて、他の方面に向つてしまつた、大方恐るべき敵が、水中から頭を擡げたのであらう。

二人はみづすましの話が、中途でとぎれた爲めに、更に他の物を見付けて、何か新しい話をきかうとして居ると、岸に近く繁つて居る浮草の中から、極めて小聲で、ヒソ〳〵と話しかけるものがある、小魚か夫れとも小さな虫が、其所にかくれて居るのだらうと、其浮草を反ね返して見たが、何もかくれては居なかつたのである。

八六　ひどらの物語

何だらう、今呼んだのは、何所にかくれて居るのだらうと、二人はやゝ暫時首を傾げて居ると、葉の裏からは前の樣に小聲で『こゝにゐます、ひどらですまだ貴方方にはお目にかゝつた事のないひどら虫です』と云ふので、二人も初めて合點が行つた。

ひどらは葉の裏から、小聲に語るやう、

『私共は形こそみすぼらしいもので御座いますが、面白い習性を有つて居ます

から、動物學者には、大層珍重されて居ります、御覽下さい私共の體は、一分にも足らぬ小さいもので、浮草の根や葉裏に附着いて、面白くもない生活をして居ます。

所が私共には、あの磯巾着と同じく、六本か七本の觸手がありますが、此の觸手は蜘蛛の網のやうな働きをするもので、小さき動物が來て、一度此の觸手に觸れたが最後、忽ち毒液を吐き出して、直に殺して自分の食物にして仕舞ひます。

私共の體は、實に不思議な再生力を有つてるもので、例へば二つに切つて、水の中に放して置けば、此の二つは間もなく二つの新しい動物になり、三つに切つても四つに切られても、夫れが必ず新しい一箇體となつて、立派に發達するので、私共の體に限つては、死と云ふ恐しい問題は、絶對に無いと云つて宜しい。

切られた片々が、悉く完全な體を具ふる事でさへ不思議ですのに、更に一層

面白いことは、二匹のひどらを合せて、留針にでも刺して置けば、間もなく合して一匹の動物となり、或は手袋や足袋が裏返しになる如くに、內外轉倒されましても、私共は實に平氣なもので、其まゝ盛んに活動します、即ち私共の生活は動物としては極めて單純なもので、實際學者が、面白い研究材料として之を珍重するのも、無理ならぬ事と思ひます。

猶仔細に、私共の生活狀態を御覽にならうと思召したら、口廣の瓶中に、水草と共に放して置いて御覽なさい、そして時々はみじんこの如き小動物を入れて下さい、すると私共は、瓶の中で思ふまゝに例の觸手を延ばして、みじんこの近付くのを待ち、巧みに夫れを捕へて、自分の食餌とするのですから、貴方方は又、私共の行動を、瓶の外からして、充分に御觀察になつたらよいではありませんか』

と、ひどらは小さき動物に似氣なく、面白い自身の習性を、滔々として述べたが、二人は追てよき機會を得て、ひどらの採集を約したら、今度は又水面に高く、黃色い花を咲いてる小さな草が、ひどらの後を受けて口を利かうとするのであつた。

八七　狸藻の物語

さて此の小さな草は何であるかと云ふに、見かけによらぬ恐しい食蟲植物で名も狸藻と云ふのである、狸藻は根がないから、水のまに／＼動きつゝ、二人を顧みて云つた。

『私共は此の樣に、常に水面に浮んで居て、如何にも呑氣に構えては居るものの、之で居て盛んに小動物を捕へて食ふとお聞きになりましたら、貴方方も定めし吃驚なさることゝ思ひます。

私共の葉の所々に付いて居る、此の小さな嚢の裝置は、世にも不思議なもの

で御座いまして、嚢の一端には、小さな口が一つ開いて居ますが、之には外から內へ押し開く辨狀の蓋があつて、しかも口の周圍には、多くの長い毛が密かに生えて居ります。

彼方此方と、水中を泳ぎ廻つた小さき動物は、さりとも知らずに、此の嚢の中で、一寸休んで行かうと、例の辨狀の口を押し分けて一旦中へ入つたが最後、此の蓋は內部から開くことが出來ませんから、驚いて騷ぎましても、もう後の祭りで、結局こゝで死んでしまひ、肉は私共の食物と成るのであります。

私共はかくして、絕えず小動物を穽に陷れては、自分の身を肥して居ますが更に此の中には、私共よりも、もつと巧みな捕蟲器を有つてるものが御座います、即ち夫れは猪籠草で、主としてジャバ、スマトラ邊の熱帶地に自生する植物ですが、東京などの植木屋の溫室內にも來て居ると聞きました。

猪籠草の葉の先半分は、變じて瓶子の形となり、上部には蓋があるばかりか下部の瓶中には、極めて清い水を湛えて居りますから、旅人が山の中で、喉の

渇いた時などには、專ら此の瓶中の水を採つて飮むさうです。

さて又瓶の口元からは、絕えず甘い蜜を吐きますから、甘いものを好む虫は喜んで瓶の口に集りますが、其大半は足を辷らせて瓶中に轉げ込み、空しくここに溺死して、猪籠草のために、養分を與へることゝなつて居ます。

動物が動物を捕へて食ふは、何の不思議も御座いませんが、植物の樣に、自分で動くことの出來ない物でさへ、可なり大きな動物を殺して食ふまでに、今の世は生存競爭が烈しいのですから、貴方方も益々奮勵努力して、人後に落ちない樣に、深く御注意あり度いものです』

と、狸藻は意外なる大氣焰を吐いて、二人を驚かせた、併し根もなき植物の口にも、聞くべき言の葉はあるものだと、笑ひながら、よい加減にして、こゝを引き揚げやうとすると、最前のひどらは再び聲をかけて、『猶お話し申し度いことがありました、時間はかゝりませんから、是非しばらくお耳を貸して下さい』と云つた。

奇妙な生活をして居るひどらの事とて、二人は再び大いなる興味を以て、其耳を傾けたのである。

八八　共同生活の物語

小聲ながらもひどらは、快活に物語つて云ふやう、

『一體私共には、二種の區別がありまして、一つは褐色ですから、之を褐色ひどらと呼び、他の一つは緑色を呈するので、緑色ひどらと名付けられます、所が此の緑色ひどらの本質は、彼の植物體に見る葉緑素と同じものです、して見ると私共は、動物でありながら、植物を兼ねて居るものでせうか。

此の不思議なる現象に就いては、學者が種々の方面から研究された結果、とう／＼其譯が判りました、即ち私共の體内にある葉緑素の如きものは、實際葉緑素ではなくて、全く一種の水藻が、私共の體内に共同生活をして居ると云ふことになつたのです。

こいそぎんちやくと、寄居蟲が共生したり、蟻と蚜蟲とが一所に棲んでることは、貴方方も既に御承知のことゝ思ひますが、私共の如き物が、しかも其體内に、水藻を宿して居ると云ふのは、如何にも不思議なる現象だと云はなければなりません。

それでは如何にして、私共の體内に、水藻が入つて來るかと云ひますと、之に就いては未だ充分の研究が出來て居ないやうですけれども、私共の體内に居る水藻は、内層の皮膜中に限つて居りますが、併し私共の卵は、外層の細胞から出來ますので、卵の中に水藻が入つて居らぬことは解つて居ます。

私共の卵は、かく體の外層に位置を占めて居りますが、やがて大きくなりますと、内層にある水藻は、俄かに發育して外層の皮膜を破り、とう／＼卵の中までへも入つてしまひます。

水藻と私共とは、此の様に互に助け合つて、面白い共同生活をして居りますが、かう云ふ關係がいつ頃から出來たかと云ふことは、しかと判りません、

殊に私共の體內に限つて生活して居る此の水藻は、最早、今日では、何所にも見ることの出來ぬ種類ださうで、其關係の古いことは、此の一事を見ても、推知することが出來るではありませんか。

あゝ小さな生物體でも、仔細に之を觀察すれば、種々の複雜極まる現象が、其所にかくれて居るのです、貴方方は之から益々理學の杖を振つて、其幽を啓き、微を探るやうに心がけて下さい、私共の如き何のなすなき小動物も、出來る限り貴方方のために、力を盡すでありませう』

と、熱心なるひどらは、親切に二人の前途を祝福したので、二人は厚くひどらの厚意を謝して、更に又綠草の蓆を布く夏野に、其不思議なる杖を曳いたのである。

八九　夕立の物語

夏の野は甚だ蒸し暑いが、木陰には一種の葉の薫りがあつて、何となく心の

清淨になるものである、二人は午後の日盛りを、野に立ちて、猛射する烈日を麥藁帽子に避けて居た、奇峰の如くに、天の一角にそゝり立つて居る夏の雲が一時に黑く變じたかと思ふ間もなく、前山には早や夕立を來して、銀の糸を下す如く、西よりさす日に反映して、一入美しく見えた。

此の時夕立は、喧しい音をして、其降る瞬間に、遠方から物語るやう、

『私共は主として、風のない日の午後に起ります、夫れと云ふのは、午前の間も水蒸氣が盛んに騰りますが、あまり高所に達することはないのです、けれども午後になりますと、高所に達した水蒸氣は、冷氣に遭つて水球となり、其下降する途中に於て、他の水蒸氣をも水球と化せしめ、愈々其量を大きくして、遂に夕立となるものです。

さて私共の參ります時には、大概雷を伴ひます、蓋し眞夏の頃は、地面に受くる熱が非常に強く、水は盛んに蒸發して、空氣中の濕氣の量が增大されるからで、且つ私共は、溫帶地方よりも熱帶地方に多く、平野よりも高地に多い

のは、全く水蒸氣の上騰の多少によるもので御座います。

話は岐路に入りますが、夏日旱魃が長く續きますと、民間では盛んに雨乞を致します、此の雨乞なるものは、實際効力があるかどうかと申しますと、元來空氣中に浮游して居る微細なる物質は、水蒸氣が水球となるには、無くてはならぬ媒介物で、或る學者の如きは、水球の內部には、必ず一個宛の固形物があるとさへ論じて居ます。

又二箇の硝子器を取つて、其一方には塵埃を多くし、他の一方には殆ど塵埃をなくして、さて双方に水蒸氣を通じて見ますと、塵埃の有る方の硝子器には他の物に比して、多く水蒸氣が凝縮するさうですから、空中の微小なる固形物が、水蒸氣凝縮の媒介となる一事は、之等の試驗によつて、最早や疑ふことの出來ぬ問題となつたのです。

所が雨乞の際には、多數の人が群集して、盛んに塵埃を飛ばせたり、煙を立てたりしますから、いくらか効力のあることも、最早や疑ふ餘地はなからうと

思ひます』

と、云ふ內にも、雲は次第に切れて、夕立は止んでしまつた、けれども二人の居る所へは、殆ど一滴も降らさなかつたから、遠山の雨後の涼風を樂しみ、西に傾く日を追ふて進む時、東天鮮かに、七彩眩き一長橋の架るのを見たのであつた。

九〇　虹の物語

日は西山に入らうとして、東天の雲間の中に、最も美麗なる七彩の長橋は架せられ、野を渡る風はいよ〳〵涼しく、露を帯ぶ草の根元には、種々の蟲が、得意の吟聲を恣にして居る。

虹は此の時、空中より遙かに二人を見下して云つた。

『私共の出來る譯は、空氣中に浮游する無數の水滴に、太陽の光線が反射し屈曲するに依るので、物理學上から申しますと、私共は眞圓で、其中心と人の目

と太陽とは、一直線の上にあります、貴方方が虹を御覽になるのは、其反射光線の虹の中心と、約そ四十一度の角を有する時に限るので、故にいつでも太陽と反對の方角に現はれ、日中前後には、決して生じないのであります。

私共の輪は、午前ならば早きだけ、午後ならば遲きだけ、愈々大きく見えるので、其譯は太陽と人の目と、虹の中心とが、一直線をして居ますから、太陽の昇るにつれて、虹の中心は次第に下るからであります。

ですから若しも富士山の絶頂などで、虹を見る場合には、全圓の虹が中空にかゝつて居て、普通地上で望むよりも、遙かに美しく、一層の奇觀を呈すると云ひます。

貴方方が人爲で虹を出現せしめやうとなされたら、太陽を背にして、口に水を含み、霧を吹いて御覽なさい、貴方方の目の前には、小さい美しい虹が、明かに現はれるでありませう、即ち此の小さき虹も、理論上から申せば、私共と少しも異らぬもので御座います。

虹の光の美しいのは、太陽光線が水球に反射屈曲して、分解されたからで、上から申しますと、赤、橙、黄、綠、青、藍、紫の順序となります、さて又虹の出現する要件としては、空氣中に多量の水球の存在することゝ、太陽が地平線に近くなければならぬ事です、私共は更に之より進んで、其理學上のむづかしい説明を申し上げ度いと思ふのですが、殘念ながら太陽は、次第に地平線下に沒し去りますから、もはや私共も、其現狀を保つて居る事は出來なくなりました、左樣ならこれにてお暇を致します』

と云ふので、二人は再び天を仰いだが、もはや虹は影も形も無くなつて、只薄黒い雲のちぎれが、空の一角を閉して、そこから時々電光を發するばかりであつた。

九一　天蛾の物語

暮色は次第々々に迫つて來た、今朝海岸の宿を出發してから、種々の事物に

遭つた二人は、身心共に大分疲れたので、早く今夜の宿を求めやうと、或る市街地に向つて進んだ、道傍の小川の水は、空の星影を宿しつゝ、愉快氣に流れて居る、其岸には月見草の花が咲き亂れて居たが、今や一羽の天蛾は、翅の音さへ勇しく、こゝに訪れて來たのである。

天蛾は二人を呼び止めて、

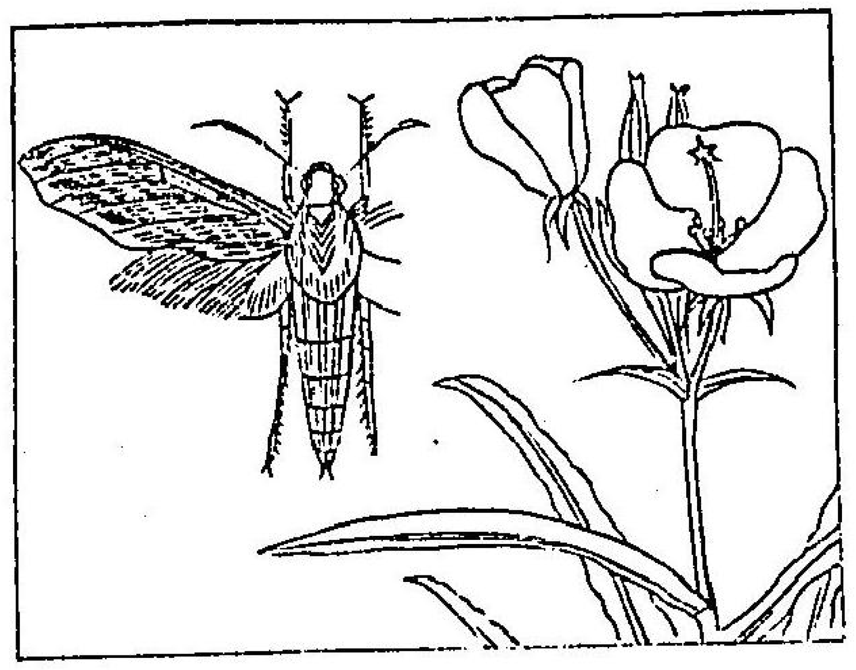
『お急ぎのやうですが、少々お待ち下さいませ、之からが、私共の世界ですから、こんなに愉快に飛び廻つて居るのです。

御承知の通り此の月見草と云ふ花は、日中には咲きませんで、日が暮れてからやつと開きます、之が日中ならば、蝶も蜂も威勢よくやつて來て、例の異花受精のお手傳ひを致しませうが、何分夜のことですから、蝶や蜂はいくら待つて居たつて、來て呉れるためしがないではありませんか。

其所へ來ると私共は、根が夜の動物ですから、餘程都合がよろしい、元來夜になると、他の花は大概花瓣を閉しますので、私共がいくら花蜜を吸はうとし

た所で、所詮思ふやうにはなりませんが、幸にも此の月見草の如き、夜になつて咲く花がありますから、私共にはどれ丈都合がよいか知れないのです。

尤も月見草の方にしましても、私共が居なかつたら、誰を賴んで異花受精の目的を遂げることが出來ませう、つまり私共と月見草とは、互に助け合ひまして、双方共に滿足を求めるので御座います。



さて大層話が理窟ッぽくなりましたが、私共も今では天蛾などゝ、立派な名に呼ばれて居ますものゝ其前身は見るからに氣味の惡いあの烏蝎であつたのです、デブ〳〵肥つて居るのを、よく烏蝎の樣だなどゝ申しますが、併し學問上の目で御覽下さいましたら、烏蝎だつてそんなに氣味の惡いものではなからうかと思ひます。

一體日本人は、むかしから習慣として、一見して氣味の惡い樣な物には、

見向きもしないと云ふ傾きが御座いますが、こんな風では、科學の發達と云ふことも、まづ〳〵望まれないかと思はれます、私共は研究のためとならば、貴方方の手に斃れることを、寧ろ名譽と存じますから、單に氣味が悪いと云ふ一事を以て、直に退けないで、どうか活きたる學問の材料としてお使ひ下さる樣に、切に希望いたします』

と、天蛾は流暢なる辯舌を振つて、大演説を試みたかと思ふと、早くも矢の如き勢で、何所ともなく飛び去つてしまつた、あゝ彼は氣味のよい活潑な虫である。

九二　蝙蝠の物語

天蛾が辭し去ると間もなく、一匹の蝙蝠は、空飛ぶ虫を追ひ廻しながら、彼方此方とかけつて居たが、二人の歩きつゝ有るを見て、やゝ低く舞ひ下つて、

『私も天蛾と同じやうに、専ら夕方から出掛けます、日中は洞穴や瓦の下に潜

り込んで、小さくなつて居るものゝ、夜は之でなか〳〵に威勢があるのです、そして害蟲を驅除することも可なり多いのですから、まんざら棄てたものでも御座いますまい。

鳥の如くに空を飛んで、しかも顔は鼠に似て居ます、動物學者は私共に、翼手類と云ふ特別の名を與へたのです、日本の内地に棲んでる私共は、から意氣地もありませんが、南方の熱帶地方に參りますと、猫程もあらうと云ふ大蝙蝠が居て、こいつは仲々恐しいもので、其大擧して果樹園を襲ふ時には、樹は蝙蝠の重量に堪えないで、片ッ端から折られて仕舞ふさうです。

又南米地方には、大動物の血液を吸收する大蝙蝠が居まして、其名をバンパーヤバットと申します、もしも南米地方の森林に行き暮れて、其まゝ森の中に憩ふて居ますと、かのバンパーヤは、漸く其人に接近して、大きな翼を靜かに打ち振り、愉快なる風を起しますから、旅人は恰も旋風器から風を送られるやうな、愉快な心地になつて、ツィうつら〳〵と眠るのです。

併し之はバンバーヤの計略なので、かうして旅人の眠つた所を見て取ると、直に其大きな翼を以て、旅人の顔を被ひかくし、急所に嚙みついて血を吸ひ取り、とう〳〵其一命を奪ひ去ると云ひます。何と驚いたことでは御座いませんか。

殊に南米地方を旅行する人が、此の蝙蝠のために苦しむのは、自分の乘馬を斃されることで、バンバーヤは種々の方法を以て、乘馬の繫いである廐屋に入り込み、馬の體に密着しつゝ、盛んに其血液を吸收しますが、馬は此の時あまりの苦しさに、頻りに其體を搖り動かして、藻搔きましても、バンバーヤは自分の思ふ存分に、馬の血を吸ひ取らない限りは、どうしても離れないと云ふことです。

幸にして、日本の內地には、こんな恐しい奴が居ませんから、私共までが肩身が廣いので御座いますよ』

と、蝙蝠は珍しい物語をしながら、ドンドン飛んで行つた、彼は一見した所、

頗る狡猾らしい獸ではあるが、併し夕方から殊に多く出る所の、蛾や其他の蟲類を捕食して、農家に大いなる利益を與へて吳れるのだから、寧ろ愛すべき小獸であると、二人は思つた。

此の時傍の草叢から、淸麗なる光を放ちて、二三匹の螢が、行手の道を照らすかの樣に、二人の前に現はれた。

九三　螢の物語

淸き光を放ちつゝ、螢は二人を導いた。

『さア之から町の方へは、私が御案內を致しませう、隨分お疲れで御座いませうが、こゝから町までは、最早や道程もいくらもありませんから、ゆつくりなさいませ』と、溢るゝばかりの愛嬌を湛えて語り出した。

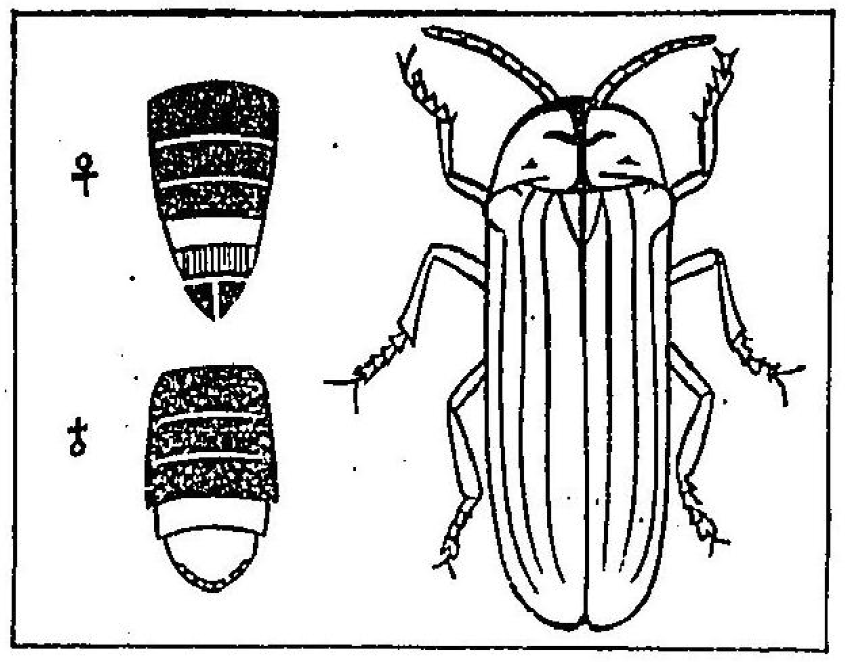
『私共は世界各國に棲んで居りますが、多少其形を異にして居るので、日本に普通なのは源氏螢と平家螢とです、何れも臀に發光器を具へ、日中は淡い黃色

をして居ますけれども、夜になれば御覽の通り、極めて鮮かな青綠色を放ちます。

卵は芥子粒程で、僅かな光を放ち、約一ヶ月を過ぎて蛆になります、蛆は一種の惡臭を分泌して敵を擊退するばかりでなく、常に農家の害蟲を捕食して、次第々々に大きくなり、翌年の五月頃には、もう蛹に化しますが、かう成れば二週間ばかり後には、翅を生じて空中に飛び出します。

世界で最も美麗に、かつ大きい螢はと申しますと、夫れはメキシコ産のもので、長さ一寸餘に達するばかりか、二種の發光器を具ふるので有名なものです、即ち一は頭に近い胸背の左右に、他の一は腹部にあります、腹部の發光器は、實に盛んなものですから、土人は提燈の代用とし、婦人は之を首飾などとして、甚だ賞用すると云ひます。

又キユーバ島の螢は、私共の如くに、川畔の草叢に居るのではなく、專ら甘蔗畠に棲んで、砂糖の汁を吸つて生きてますから、砂糖で以て飼育が出來ると聞



きました、英吉利産のになりますと、雄は立派な總々した觸角を有つて居るにも拘らず、少しも光を出しませんが、之に反して雌の方には、翅のない代りに、美しい發光器を具へて居て、夜になれば自分はじつと草の根元に潜みながら、雄の訪ねて來る樣に、豫め提燈をかゝげて待つと云ひます。

夫れから亞米利加産のは、矢張り雌に翅がなくて、體の節々から見事な光輝を放つと聞いて居ます、幸に私共は、日本に生れたおかげで、雄にも雌にも、立派な翅が御座いますから、何所へでも自分の思ふ所へ、勝手に飛び歩くことが出來るのです。

螢の發光に就いては、燐の如きものが含まれて居るのだと云ふのが、從來の想像説でありましたが、實際は或る特殊の脂油で、之が酸化作用には、少しの熱をも伴ひませんから、彼の燈火の如くに、酸化作用のために、熱を發して光

を減じ、且人の視力を損するものに較べますと、私共の光りは全くそんな缺點がありません故、之を人生に利用したら、實に理想的の燈火が得られると存じますが、まだ今日では誰も此の事に着目した者がない樣です』

と行く〲語つて居たが早くも市街の入口に來たので、螢はこゝで二人に別れ、元の川畔へ引返してしまつた。

九四 海綿の物語

二人は螢に別れて、夜の市街の花やかな電燈の下を歩き、やがて一旅舍に入つて、はじめて草鞋の紐を解いたが、何を措いても、旅塵を拂つて、日中の疲勞を休めねばならぬと、早くも浴室に突貫したのである。

旅舍の浴室には、特に清潔なる海綿が備へてあつたが、二人は之を以て頭を洗ひながら、海綿の物語を聞いた。

『海綿動物と申しますと、偕老同穴だの拂子介だのを總稱するのですが、普通

一般に知られて居るのは、即ち浴用海綿……かく云ふ私共に限られて居ます。

私共が初め海底に居ました頃は、ほゞ球狀をなして、其表面には大小無數の孔が開いて居て、內部には又縱横に溝を通じて居りました、そして私共の體は內外中の三質より成り、其外層は扁平な一列の細胞で、夫れが體の表面や溝の內面を被ひ、內層は特別の甄毛細胞で出來て居ります。

所が此の甄毛は、小室の內面にばかり生じて居ますから、此の小室をば甄毛室とも呼ばれ、次に中層は最も厚くて、透明なる硬質より成り、私共の體を支ふる所の骨格は、實に此の中に貯藏されて居ます。

私共の多く產するのは地中海で、普通六十尺以內の海底の岩に附着いて居ます、で生きてる時には、水は常に小さい孔から入つて、大きい孔から拔け出しますが、水が甄毛室を通過する際に、其中に交つて居る種々の食物は、殆ど殘らず甄毛細胞の手に捕へられるのであります。

御覽の通り私共は、肉を棄てゝ漂白された角質の骨格なので、云はゞ貝殼も

同様、實に哀れな死骸です、優等品は矢張り地中海の産を推しますが、普通浴場で使用せられるのは、我琉球、及び薩摩の七島などに産するもので、品質は迚も地中海産の足下へも寄られない劣等なものです。

猶海綿類は、其骨質によりまして、角質、硅質、石灰質等に分つことが出來ます、で私共の如き浴用海綿は角質で、前に申しました偕老同穴や拂子介の類は硅質、そして石灰質に屬するものは、深海中に産しますから、従つて種類も少く、又貴方方の目に止ることも稀なのであります』

と、浴用海綿は、くど／＼と話を續けて居たが、二人は間もなく、充分に身體を洗ひ清めたので、海綿に別れて浴室を去り、更に座敷の食膳に向つて腹を拵へた。

此の時室内の電氣燈に、五六匹の蜉蝣が飛んで來て、頻りに其火を取らうとするので、二人は先づ蜉蝣に注意をしてやると、彼は初めて悟つた如くに、二人に向つて口を利きはじめた。

九五　蜉蝣の物語

『よく御注意下さいました、併し私共は、もう今夜の内に死なねばならぬのです、御覧下さい私共の翅は、こんなに弱々しいものですから、少し強い風でも吹かうものなら、夫れこそ何所まで飛ばされるかも知れません。

又口はと申しますと、之も短い壽命の悲しさには、何も食はないでもよい様に、名ばかりの口が付いて居るばかり、世の中に何が短命だとて私共位短い壽命のものは、他に一寸見當りませんでせう。

折角此の世に生れたかと思ふと、まだ二時間も經たないのに、もう死んでしまふのですが、併し私共は此の間に、大切な仕事を致しまして、子供を殘して置くのですから、死すとも何の怨みがありませう。

尤も私共の子供が、川の中で生活して居る間は、他の蟲類に較べて、決して短いとは云へません、否大いに長い、足かけ三年間もかゝります、勿論私

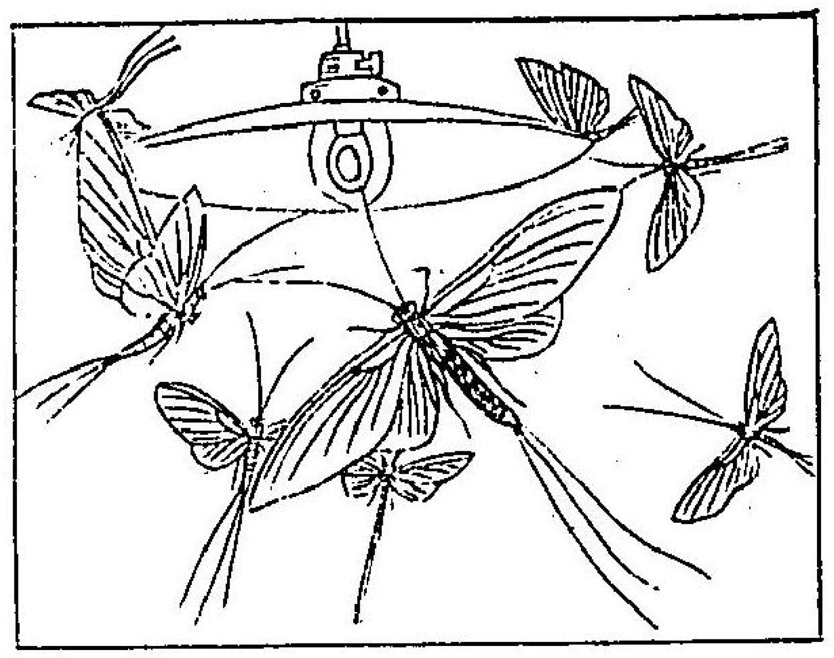
共の子供の時代には、殊に流れの急な瀨に、僅かばかりの巢を造つて、其所に棲んで居るのですから、一旦雨でも降つて、大洪水に襲はれやうものなら、忽ち其水と共に流されてしまつて、再び浮ぶ瀨はなくなるのです。

かうして兎も角三年を送つて、翅が生へると二時間の命しかないのですが、私共にとりましては、此の二時間でも相當に長い思ひを致しますので、成る程人間の五十年に較べましたら、或は短命と云はねばなりますまいが、自分で滿足して居ますから、愚痴をこぼす必要はありません。

聞けば亞米利加には、十七年の長い間、暗い土中に潛つて居て、一旦翅を得たが最後、僅かに二三日の壽命しかない、アノ十七年蟬と云ふ虫が居ると申しますが、之等は即ち私共の、よい仲間かと思はれます』

と、蜉蝣は笑ひながら喋つて居たが、其聲が次第々々に細くなつて、やがて全く聞えないので、どうしたのかと見ると、彼等は同じ樣に、電氣燈の笠を枕として、早くも息を引き取つたか、哀れな死骸を殘して居つた。

二人は蜉蝣の果敢ない命を哀れに思ひ、せめて其死骸でも葬つてやらうと、二階の欄干から庭上へ投げ捨てると、途端に人魂の如き流星が、天の一角から、長き尾を引きながら現れて、再び空間に其姿を沒してしまつた。



九六　流星の物語

晩食後の涼風に、輕く袂を拂はせつゝ、今しも二人は二階の欄によつて、賑かなる市街の有樣を眺めて居つた、夏の夜の空は星近く天の一邊から一邊に架け渡された如き天の川さへ、今宵は一入鮮かに目に入るので、二人は少なからぬ興味を以て、悠久なる天體に對し、種々の想像を恣にして居た。

此の時第二の流星は、足速く飛びつゝ物語るやう、

『元來私共の軌道は、楕圓形又は双曲線をなして、常に貴方方の地球を回轉し

ますが、其地面上との距離は、五千哩程です、流星の中でも、最も猛烈なのは、往々地上に落下することがありますので、此の際の現象は、實に物凄いものです、曾て千八百六十八年に、アレキサンドリヤの附近に落ちた時などは、丁度正午頃でしたが、今迄晴れ渡つて居た空が、俄かに眞黒に曇つて來ましたので、畑に出て居た農夫は、仕事を仕舞つて家に歸らうとし、町を歩いて居る商人も、夕立を避けやうとして、浮足になつて居ますと、忽ち黒雲を破つて、大きな彈丸の如きものが落ちて來ましたので、中には正氣を失つて倒れるものもあり、或は世界の滅亡する時が來たかと思ふ人もあつて、非常に恐れたさうですが、後で流星が落ちて來たのだと解つて、皆々やつと胸を撫で下したと云ひます。

東京上野の博物館に陳列されてある隕石は、矢張り大流星ですが、落ちて來る途中で碎けなかつたもので、云はゞ不發の彈丸に等しいものでせう。

併し私共の如き小さな體のものは、元より地球までも達することが出來ません、無論落ちて行つて、貴方方のお目にかゝり度いとは思ひますが、發火する

と間もなく、體を燒かれてしまつて、其まゝ消滅するのであります。

さて私共は、普通地上を距ること七十五哩の空間に於て光を發し、五十哩の地點で消え失せるのです、尤も其運行の速度は、一秒時間に七哩以上、百五十哩に達することがあります、目の廻るやうな速さではありませんか。

斯くの如く私共は、發光と共に早く體を燒き盡されて、地球上に達することは出來ませんが、萬一之が貴方方の所まで達するものとしたら、夫れこそ一大事で、夜も晝も鐵の傘でもさして出なければ、道を歩くことさへ危險だと思はれます、と申しますのは、或る天文學者の實驗によりますと、一夜の中に發射する小流星の數は、優に二千以上に達するさうですから、一日一夜では少くとも五千位の數が、地球の其所彼所へ、バラ〳〵と飛んで來るに違ひありません。

殊に天の獅子宮から發射する大流星群は、三十三年目毎に現はれますが、曾て千八百三十三年の秋に、米國のボストンで觀測したのでは、同地だけでも二

十四萬個を數へたと云ふではありませんか』

流星はかく語りつゝ、更に其姿を見せなかつた、近頃夜々天の一角に、彗星が現はれると云ふので、二人は今宵の晴空を幸ひ、其所在を物色して居ると、遙か南方の天より、幽かながらも、二人の名を呼ぶ者があつた。

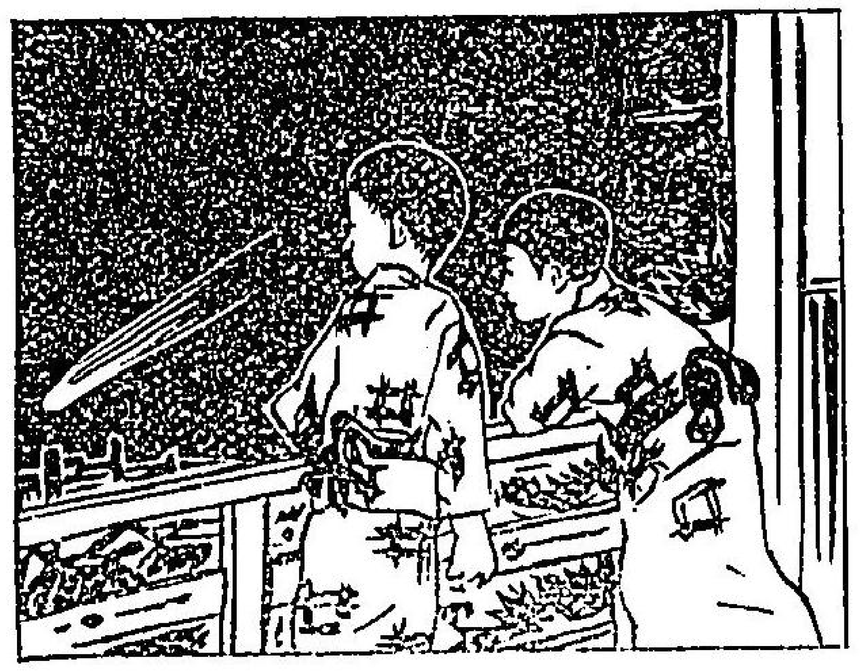
九七 彗星の物語

遙かの天の一邊から、二人の名を呼んだのは、果して何者であつたかと云ふと、之こそ今頻りに其所在を物色して居る所の彗星が、幽かながらも他の星體の中から、特別の形を以て、二人を招きつゝあるのであつた。

彗星の言葉は、甚だ不明瞭であつたが、やがて彼は力めて聲を大きくして、

『御覧下さいます通り、私共は矢張り光輝ある星の如き核と、之に附屬する星雲の如きものとから成り立つて居ます、尤も中には肝腎の核が無くて、只星雲ばかりのもありますし、或は球形を呈することもありまして、頗る不規則の星

ですが、其最も普通な形としては、星雲の箒の如くに開いて居るもので、古來私共が箒星と呼ばれてるのも、實に之が爲めであります。



又同じ一つの彗星にしましても、常に其形を變じまして、或は尾を失つたり、若くは之を大きくする等のことがあつて、變幻窮りなきものとせられて居ますが、概して申しますると、太陽に接近した時には、立派な尾を生じて、其反對の方面に擴がるので、之に就いては、天文學者の間にも、種々の異論が御座いますが、恐くは太陽と私共との間に起る、電氣作用によるのであらうと云はれて居ます。

元來私共は、矢張り地球や其他の遊星と同じ樣に、太陽系統の一部に屬しますが、何しろ其運行の速度が、極めて不規則で御座いますから、天文學者が、どんなに苦心をしましても、之を測定することが出來ないさうです。

故に俄かに現はれるかと見れば、又俄かに沒してしまふと云ふ、氣狂ひじみた眞似をして居ります、殊に私共の軌道は、拋物線狀をなして居ますから、一旦出現したものは、大槪宇宙の或る遠い〱所へ飛び去つてしまつて、再び歸つて來る時がないと申してもよろしい。

尤も今日まで、地球の天文學者が、仔細に觀察した結果として、約十五種ばかりの彗星は、他の者の如くに、拋物線軌道によらないで、或る大いなる軌道で以て、太陽の周圍を回轉して居ることが判りました。

先年大分世間でやかましかつた、かのハレー彗星の如きは、即ち其一つですが、何と申しましても、大きな軌道を運行するのですから、其再び回轉して來て、地球の人の目に入る迄には、少くとも七十餘年を要すると云ひます。

併し私共は、前にも申しました通り、絕えず其形を變じますから、今後七十年の後に現れるハレー彗星が、果してどんな姿をして來るかは、今より豫想することは出來ません』

かう云つて彗星は、次第に回轉しつゝあつた、そして之に代つて語りはじめたのは、怪しい姿をした星雲であつた、勿論天眼通を有する二人の目には、よく星雲の形が見えるのである。

九八　星雲の物語

興味ある星雲の物語を聞くべく、二人は目を刮つて明かな天を仰いだ。

『私共は太陽や地球の原始時代の形と同じ性質のものであります、精巧なる望遠鏡で見れば、廣き宇宙の各方面に、私共の多くが點々として散在して居るでせう。

元來天體と云ふものは、世界の出來なかつた前には、全く朦朧たる瓦斯體で、夫れが宇宙の間に散らばつて居ましたが、分子引力の作用で、次第に一所に集り、かくして出來上つたのが、無數の星雲であります。

所が瓦斯體の分子が有つて居た力は、遂に變じて熱となり、光輝を放つ大き

な塊となつて、盛んに回轉運動を起しますが、此の運動のために、絶えず熱を空間に發散しますから、大きな塊も次第々々に冷縮し、同時に回轉運動は益々猛烈となります。

さて此の結果、塊は球形に變じまして、今日見る所の如き、多くの星が出來たので御座います、そこで又太陽系統に就いて申しますと、此の系統の中心體は勿論太陽で、例の回轉運動のために、中心體から分離したものは、天王星、海王星、木星、土星、金星、水星、地球などで、かの月の如きは、地球から更に分離した衛星に過ぎないのです。

一體空間の温度と云ふものは、非常に低いのですから、如何に熱度の高い塊も、忽ちにして冷縮しますが、太陽ばかりは、中心體だけに、體も大きく、熱量も夥しいもの故、今日に至るも、猶猛烈なる光輝と熱度とを發散させて居ります。

貴方方の地球は、太陽の一部から分離した極めて小さな塊なので、熱量も

從つて少く、遂に冷却しましたが、更にかの月は、小さな地球から分離したものですから、一層早く冷却してしまひました。

かう云ふ有樣で、貴方方の地球は、今日と雖、猶だん〱冷却しつゝあるのですから、數千萬年の後には、今日見る所の如き、火山や温泉の類も、悉く消滅し去つて、水分や空氣は地の底に吸收せられてしまひ、そして動物も植物も、何一つ殘らぬこと、猶今日の月の世界の如くなることは、私共の保證する所であります。

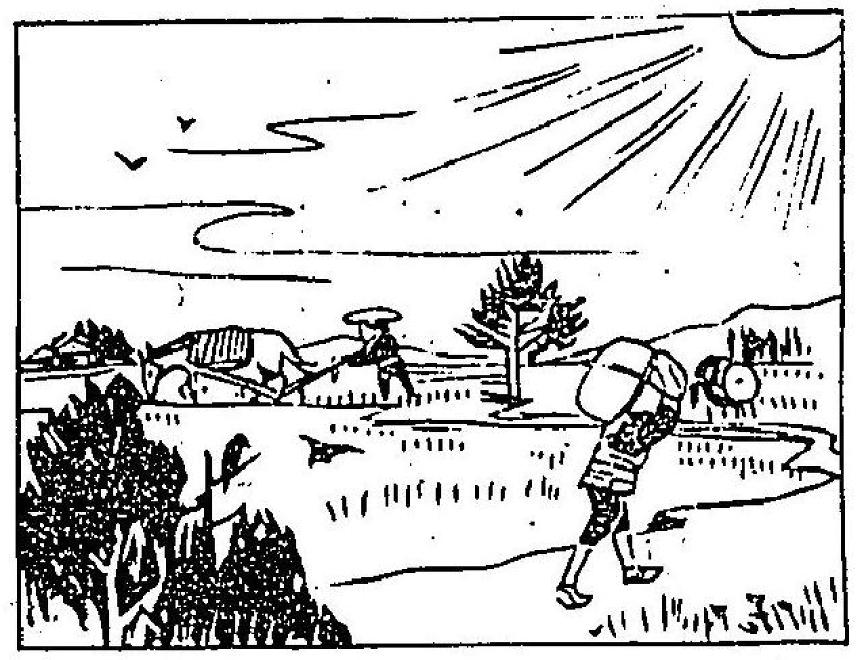
と、星雲は自身の經驗によつて、世界滅盡の恐しい解説を試みた、かくて夜は次第々々に更け渡つて、夥しき星體は、ます〱光輝も鮮かに、何等か自然の私語を漏らすかの如くに見えたが、二人は晝の疲れで、永く想像を恣にするなく、やがて安樂なる床中の人となつた。

九九　勢力の物語

此の時二人の枕頭に現はれたのは、勢力と云ふ、一種無形の朦氣であつた、彼は其姿をこそ見せないけれども、言語は頗る明瞭である。

『君方の勢力の盛んなのには感服の外ない、短き時日の間に、多くの事物を研究して、しかも更に疲勞もしないのは、實に頼母しいことゝ云はざるを得ぬ、元來鳥が空を飛ぶにも、獸が地を走るにも、或は魚が水を泳ぐにも、人が運動をしたり、物を考へたりするにも、夫れ〲相當の勢力を費さなければならぬ、所が此の勢力を、直接に與へるものは、何であるかと云ふと、食物である、動物と食物との關係は、恰も石炭と蒸汽機關の如きもので、一度之が供給を怠つたが最後、勢力の維持は到底出來ないのである。

そして動物の食物は、主として植物であるから、云はゞ植物は、動物の勢力の藏の如きものだ、然らば其植物は、如何にして動物の勢力となる食物を作るかと云ふに、夫れは根から吸收した水分と、葉から吸つた炭酸瓦斯とを、日光の作用で同化し、以て澱粉を作るのだ。



所が此の澱粉は、糖類に變じて植物界を回りつゝ、變じて植物體を組織し、餘つたのは澱粉のまゝで、或る部分に貯藏されるので、猶此の外に植物は、動物の食物として、最も必要なる蛋白質をも作るが、何れにしても天の覇者たる太陽が、遍く照らす光線が有つて居る、大きな勢力が變化して、動物を養ひ又植物をも育てるのである。

あゝ恐るべく感ずべきは、太陽光線の勢力である、文明の利器が絶えず回轉して、人生に福利を與へつゝあるのも、詮じ來たれば太陽の恩に歸さなければならぬ、君方は今更めて此の勢力を授つた、慈愛の太陽に向つて、謝意を表すると共に、一心して此の勢力を利用する様にしなければならぬ』

と、云ふかと思へば勢力の聲は、もう聞えなくなつてしまつたが、二人は此の時、既に夢の世界に遊んで、何事をも知らなかつたのである。

一〇〇 大團圓

二日に亘る見學旅行に、思ふまゝ熟睡して居ると、忽ち枕頭で呼びかけるものがある、さては夜が明けたかと、二人は驚いて枕を擡げて見ると、見覺えのある白髮の老人、オ、之は忘れもせぬ、春の神であつた。

前に見た時よりも、一入神々しい風をして、二人に向ひながら、

『杖の功能はどうであつたか、定めし送迎に遑なき迄に、多くの事柄を見たであらう、併し此の杖は、今日を限りとして、私に返して貰はねばならぬ、いつまでもこんな物を用ゐて居ては、學問の甲斐がなくなるであらう。

杖は他人の力である、苟も社會へ出て奮鬪しやうとする者は、先づ自分の力で以て、やれるだけやるがよい、否やれなくなるも、決して挫折してはならぬ、今勢力の神が云つた通りだ、薄志弱行は君達の執るべき道ではないから、飽くまでも鞏固の意志を持つて進め、努力せよ、奮勵せよ、汝の力で額に汗する者

を、神は喜んで保護するぞ、さらば〱若者、君達が今日より後の活動を、神は樂んで待つのである』

と、云ふ其言葉の終らぬに、もう春の神は何所ともなく去つてしまつたので、二人は互に顔見合せつゝ、先刻まで枕頭に置いてあつた、あの大切な杖はと見ると、夫れも影も形もなくなつて居た。

折りから東の窓が薄明くなつたので、二人は床を蹴つて起き出ると、旅舍の一室と思つたは、矢張りいつもの寄宿舍だつたので、さては二日の見學旅行も、全く夢であつたのかと、いよ〱其不思議に驚いたが、今さし初めた太陽の光に、更に新しい希望の色を認めて、奮勵努力することを天地の萬物に對して、堅く盟つたのである。

少年教育 自然界の智識 終

明治四拾五年四月十七日印刷
明治四拾五年四月二十日發行

不許複製

正價金四拾五錢

著作者 木村小舟

發行者 東京市神田區裏神保町六番地 國文館代表者 高岡安太郎

印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地 荻原勝次郎

印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地 博文館印刷所

發行所 東京市神田區裏神保町六番地 國文館

文學博士　幸田露伴先生校訂

南總里見八犬傳

全八冊ポケツト形
天金美裝箱入
各一冊定價金六十錢
各郵稅金六錢

馬琴が我江戸文學の代表的作物にして其著八犬傳が又代表的作物たるは言を俟ざる所なり。本書は實に幸田露伴先生の嚴密正確なる校訂を經原文と一字一句の相違なく之を其儘活字に組みしもの。而して加ふるに全八冊各壹部毎に現代文學界及び美術界大家の手になれる序文と口畫を以てす、裝幀又美、携帶便、誠に近時出版界の一大偉觀たり、讀者本書を座右に備へられんことを勸む

((自然を描きたる興味ある書))

木村小舟君著

樂しき天然

全一冊菊判上製
紙數約三百餘頁
挿畫數十個
近刊

草花謠ひ禽蟲呼び、星辰語り露滴答ふ、樂しきは天然界の有樣なるかな、著者この間に遊びて、濃艷佳麗の筆を携へ、彼等が歌謠曲調を聞きて、巧みに之を詩化せしめ、濁れる現代の讀書界に、一脈の清氣を與ふべく此の書は成れり、文を好み自然を愛する少年子女の胸底の琴線に觸れて、如何に美しき詩境を現出するかは、乞ふ發售の日を待ちて知り給ふべし。

泉斜訂君
原穂村君　共著

書簡文作法

全壹册四六判箱入
紙數三百二十頁
特價金四十五錢
郵稅金八錢

人の處生上最も必要なるものは書簡文なり、遠地の人と四季寒暑の音問をなすにも、商業上の用件にても、一枚の葉書にて事足る、然れども書簡文の作法を知らずば、受信者をして意外の迷惑を感せしめ、或は事件の混倒する事等ありて頗る煩はしきもの也、本書は初學者に對して、よく其採るべき方針を授けたる羅針盤なり燈明臺なり。

大町桂月先生校訂
木村小舟先生編纂

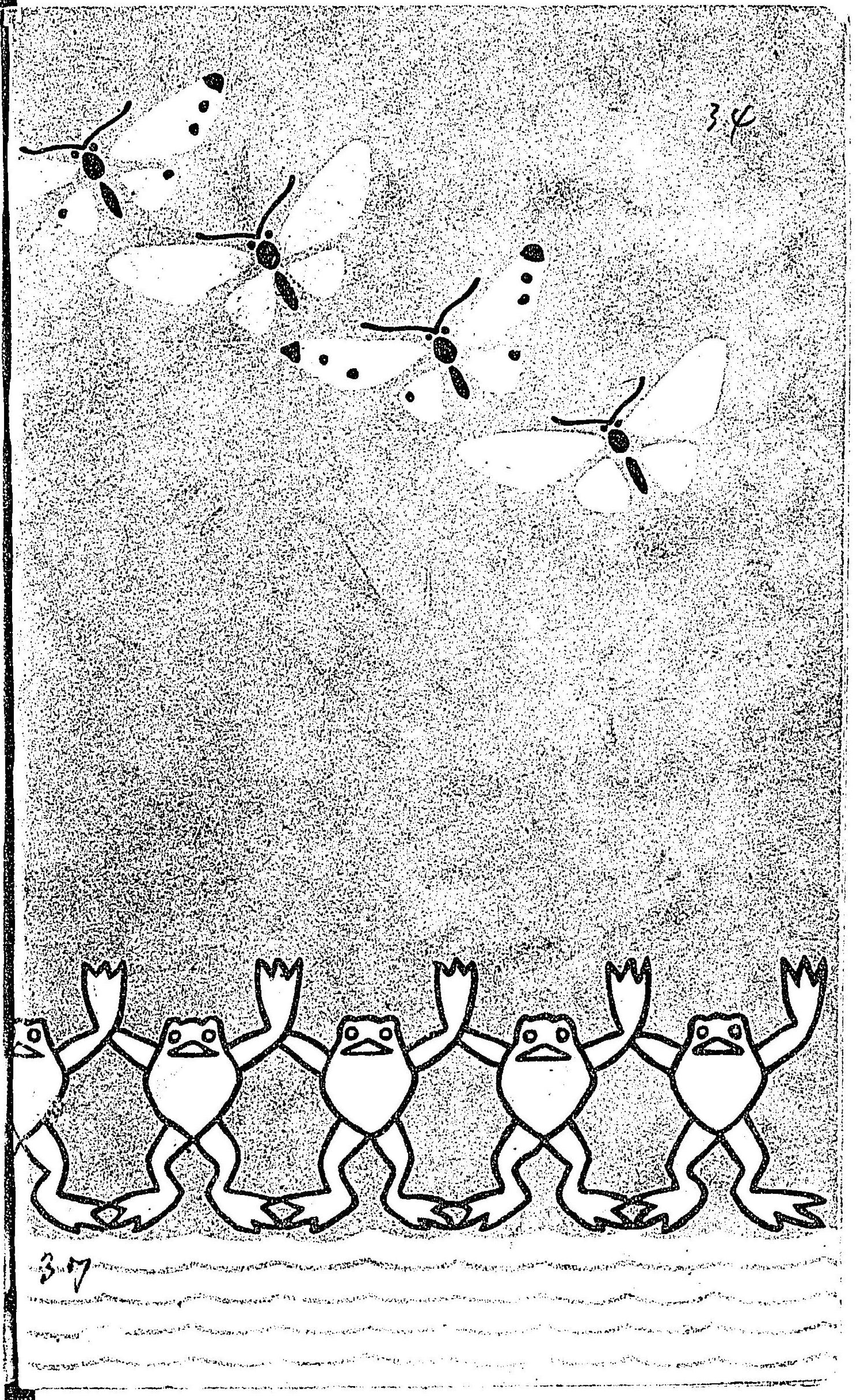
書簡文用語辭典

全一册ポケツト形上製
紙數二百七十餘頁
定價金四十五錢
郵稅金六錢

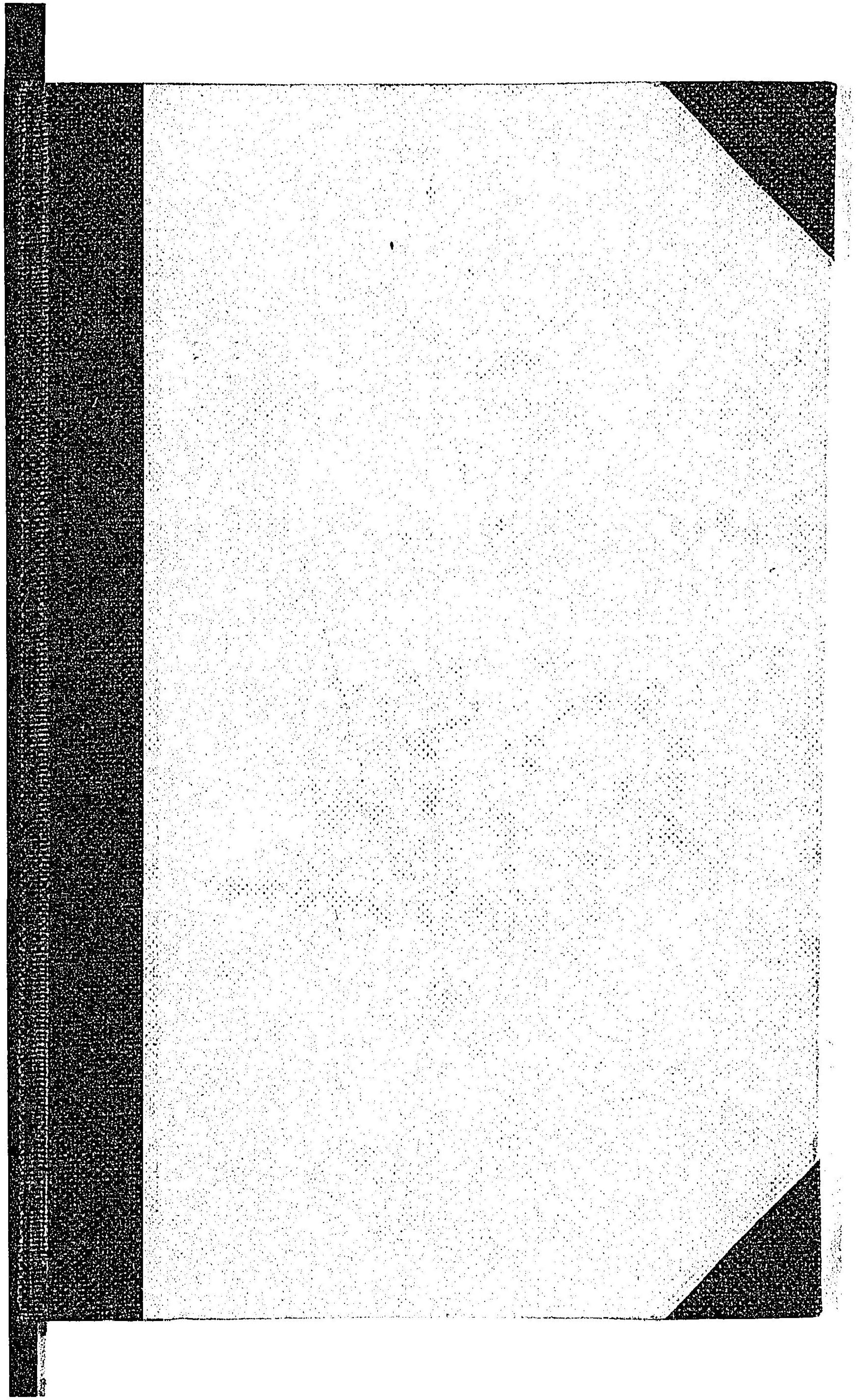
書簡を書く際に不圖其文字を忘れて、容易に思ひ出せぬ事あるは、何人も經驗せし所ならん、本書は普通一般に使用せらるゝ用語を廣く集成して、いろは引に排列したるが故に、如何なる文字も直に搜し出すことを得べく、日常机上に備ふれば、多大の便利を享くべし、鼇頭には書簡用の名詞を摘記して、前書の姉妹篇たるに負かざらしめたり。

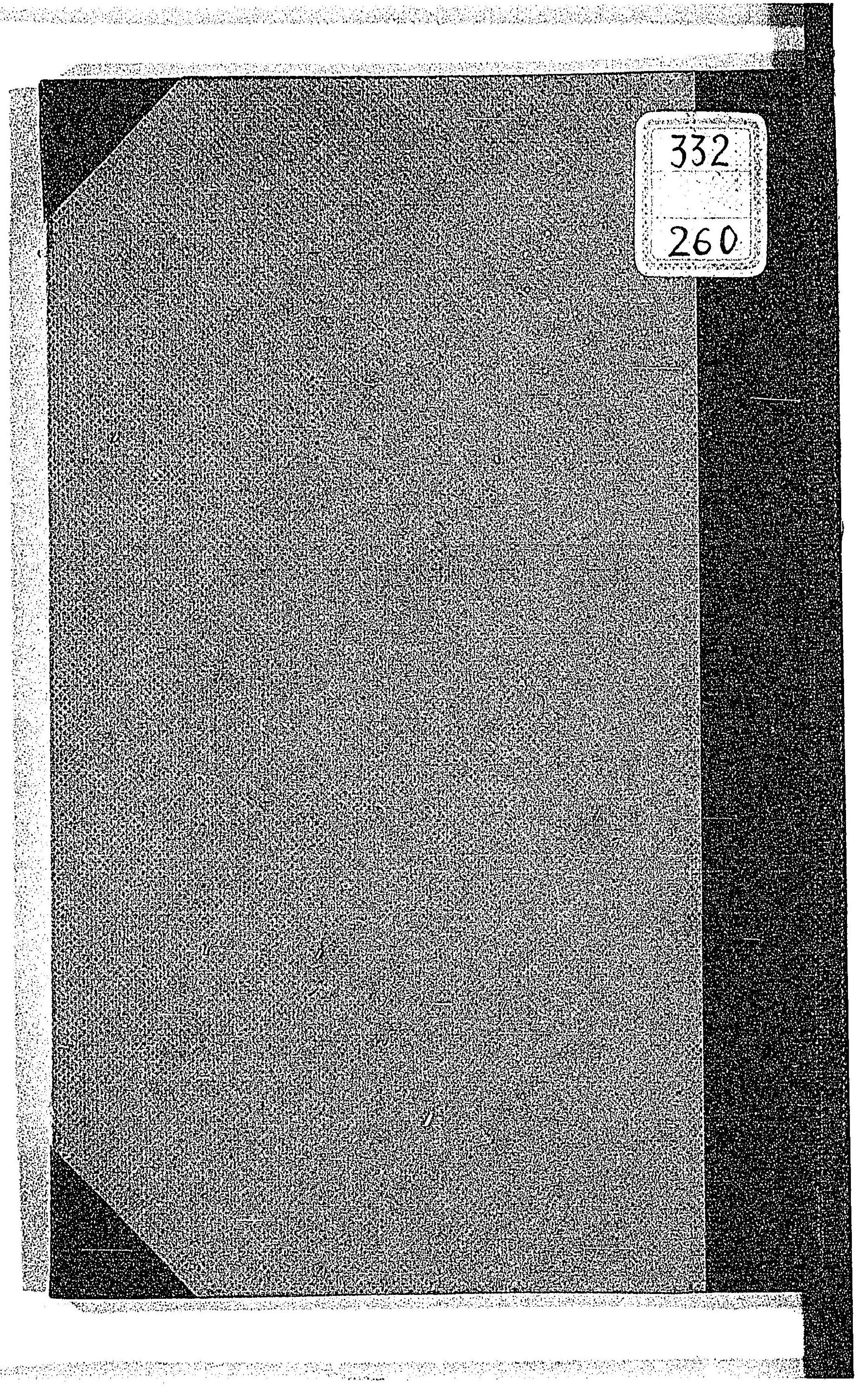
882

260



332
260





052817−000−4

332−260

自然界の智識

木村　小舟／著

M45

CAA−0074